柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会
第１２５回定例会および１０周年事業「公開勉強会」　会議録

日　　時　平成２５年１１月６日（水）　１５：００～１８：００
場　　所　柏崎市産業文化会館　３Ｆ大ホール
出 席 委 員　浅賀、新野、石坂、川口、桑原、佐藤、髙桑、髙橋（武）、髙橋（優）、武本（和）、武本（昌）、千原、徳永、内藤、中原、前田、吉野

以上　１７名

欠 席 委 員　三宮、竹内、渡辺

以上　３名

（敬称略、五十音順）

その他出席者

公開勉強会講師
東北大学名誉教授
株式会社テムス研究所　代表取締役所長　北村　正晴　氏

原子力委員会原子力規制庁　中島政策評価・広聴広報課長補佐
柏崎刈羽原子力規制事務所　内藤所長　山崎原子力防災専門官
北村原子力防災専門官
資源エネルギー庁電力・ガス事業部
重村原子力発電立地対策・広報室長補佐
柏崎刈羽地域担当官事務所　橋場所長
新潟県　熊倉防災局次長
藤田原子力安全広報監　荻原主査
柏崎市　会田市長
内山危機管理監　小黒防災・原子力課長　関矢課長代理
野澤主任　樋口主事
刈羽村　品田村長
太田総務課長　山﨑主任
東京電力（株）横村所長　長野副所長　西田リスクコミュニケーター
杉山地域共生総括GM　中林地域共生総括G
山本地域共生総括G
（本店）伊藤立地地域部長
ライター　吉川
柏崎原子力広報センター　須田業務執行理事　石黒主事

◎事務局

お疲れさまでございます。事務局から始まります前に、お配りしました資料の確認をさせていただきたいと思います。傍聴の方も同時に確認をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。座らせていただきます。

まず最初に、委員さんにだけ配付しております小さい紙で「質問・意見等をお寄せください」をお配りしてあります。次は「柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会第１２５回定例会・１０周年事業「公開勉強会」次第」であります。１点、この中で訂正をお願いしたいと思います。３の１０周年事業「公開勉強会」の欄でありますが、（２）会長挨拶、講師紹介が１５：０５となっておりますが、訂正させていただき、１５：２５となりますので、よろしくお願いいたします。

次に、地域の会第１２５回定例会地域の会事務局資料「委員質問・意見等」になります。次に、２５年１１月６日、柏崎市産業文化会館、「地域の会「定例会・公開勉強会」出席者名簿」になります。同じく「柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会　活動のあらまし」になります。次に「「仮称：柏崎刈羽原子力発電所の安全運転を確保する地域の会」設置に向けての基本的な考え方」であります。これにつきましては、平成１４年１４月１９日の資料になります。次に、本日講演をいただきます北村先生の講師のプロフィールであります。次に、北村先生の資料であります「原子力に向かい合う対話の形を探して」になります。次に、地域の会第１２５回定例会資料、原子力規制庁であります。資料１「前回定例会（１０月２日）以降の原子力規制庁の動き」、同じく資料２「原子力規制庁の主な対応（１０月２日以降）（東京電力福島第一原子力発電所関連）」であります。次に資料３「放射線モニタリング情報」であります。次に、新潟県防災局原子力安全対策課「前回定例会（平成２５年１０月２日）以降の行政の動き」になります。資源エネルギー庁柏崎刈羽地域担当官事務所「前回定例会（平成２５年１０月２日）以降の主な動き」になります。次に、東京電力株式会社柏崎刈羽原子力発電所「第１２５回「地域の会」定例会資料〔前回１０／２以降の動き〕」であります。同じく東京電力株式会社「福島第一原子力発電所で発生した汚染水漏えいに関する貴庁長官指示に基づくご報告について」であります。次に、Ａ３の横長になります「東京電力（株）福島第一原子力発電所１～４号機の廃止措置等に向けた中長期ロードマップ進捗状況（概要版）」であります。同じく「委員ご質問への回答」であります。最後に「電力需給に関する委員ご質問への回答について」になります。

以上でございますが、そろっておりますでしょうか。不足などございましたら事務局へお申し出ください。

それから、いつもお願いしておるところですが、携帯電話はスイッチをお切りいただくか、マナーモードにしていただきますようお願いいたします。傍聴の方、プレスの方で録音される場合は、チャンネル４のグループ以外をお使いいただきたいと思います。また、報道関係取材につきましても、会の進行の妨げとならないようご配慮をお願いいたします。委員の皆さんとオブザーバーの方は、マイクをお使いになる時はスイッチをオンとオフにしていただきますようお願いいたします。

傍聴の皆様にお願いいたします。今回の定例会及び公開勉強会は、発言や質問等はできませんので、あらかじめご了解をお願いしたいと思っております。

それでは、第１２５回定例会・公開勉強会を開催させていただきます。公開勉強会の進行につきましては、委員の石坂さんにお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

◎石坂委員

それでは、本日のこれからの公開勉強会の進行役を務めさせていただきます、委員の石坂でございます。どうかよろしくお願いいたします。

それでは、開会に先立ちまして、本日お忙しい中、足をお運びいただきましたオブザーバーの方々のご紹介をさせていただきます。代表の方々のご紹介をさせていただきますが、皆様方におかれましては、皆様のご紹介が終わりました後に、一言ずつのご挨拶をお願いをいたします。

まず、柏崎市長、会田洋様。刈羽村長、品田宏夫様。新潟県防災局次長、熊倉健様。原子力規制委員会原子力規制庁政策評価・広聴広報課課長補佐、中島和弘様。資源エネルギー庁電力・ガス事業部原子力発電立地対策・広報室室長補佐、重村健二様。東京電力株式会社柏崎刈羽原子力発電所所長、横村忠幸様。

それ以外のふだんお見えになっていらっしゃいますオブザーバーの皆様に関しましては、皆様お手元の資料で紹介にかえさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、柏崎市長、会田洋様よりご挨拶をお願いいたします。

◎会田市長（柏崎市）

それでは、改めまして皆様こんにちは。手短に挨拶をするようにというあらかじめのお話がありましたので、簡単に申し上げたいと思いますけれども。

改めまして、柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会の皆様方の日ごろの大変なご努力に感謝を申し上げたいと思っておりますが、平成１４年ですか。東京電力の不正問題を契機にして、この地域の会がそれを踏まえてスタートして、まさに発電所の透明性を確保するということをメインにしながら、特に原子力発電所の安全性の問題を中心にして、これまで非常に精力的な活動を続けてこられているわけでございますけれども、数えて１０年、１１年目に入っているわけでありますし、今日のこの公開勉強会が１２５回目の例会ということでございますので、大変に驚いているというか、大変な数を積み重ねてきたなと思っておりますし、恐らくというか、この中には初回から委員として加わっておられる方も何人かいらっしゃるのだと思いますけれども、恐らくスタートの時点で１０年もこの会が続くとは、誰もと言っていいかどうかわかりませんが、あまり考えていなかったのではないかなと思いますけれども、しかし、委員として参加をいただいている皆様方の本当に熱心な取り組みのおかげで１０年続いてきたと。

その成果として、まさに今一番求められている原子力行政、原子力発電所の安全ということはもちろんでありますけれども、これに対する信頼性、信頼を高めるといいますか、信頼回復、その基本となるこの情報公開、透明性を確保するという意味で、非常に大きな役割を果たしてきていただいたと。その成果は極めて大きなものがあると評価をさせていただいているわけでございまして。これまでの取り組み、これを踏まえて前回ですか、私も申し上げたのでありますが、１０年の一つの区切りは超えましたけれども、１０年たちましたので、これまでの取り組みの成果なり、課題なり、こういったものを改めて地域の

会としても総括をしていただいて、次のステップをどのような形でまた踏み出していくかといいますか、継続をしていくのかということについても、ぜひご検討いただきながら、さらにこの地域の会の役割がそれを十分に果たせるようにお願いできればというふうに思っているわけであります。

何といいましても、長いこの柏崎・刈羽における原子力発電所をめぐる歴史経緯の中で、これを推進する、あるいはそれに反対をする等々も含めて、さまざまな意見が、あるいは立場の違いがある中で、立場の違い、意見の違いを越えて一つのテーブルについてこのような会が運営されてきたということが、何といっても極めて意義が深く、そのことを通じて先ほど申し上げました透明性を確保するという会の目的はもちろんでありますけれども、柏崎・刈羽の住民の皆さん同士のお互いの理解を深める、意思疎通を図るという意味で大変意義のある取り組みが継続されてきているものと思っております。

この会としても、地域の会のニュースということで、あるいは、ほかのいろんな手段を通じて、今日の公開勉強会もそうでありますが、広く地域の皆さんにもその成果を発信をしているという努力もされているわけでありますけれども、そういった市民・村民にさらにその輪を広げていくという取組課題についても、今後ともまたひとつ継続をしていっていただければなと思っているところであります。

あとは、今日はいろいろオブザーバーの皆さん方からも、本当に毎回出てきておられて、今日もご出席いただいております。行政との関係も地域の会の皆さんとのやりとりも、年に１回、今年は２回目になりますけれど、お会いする程度でありますが、この辺も今のような状況を踏まえますと、もう少し意見交換の場があってもいいのかも。そのような気もいたしておりますけれども、その辺りも含めてよろしくお願いしたいなと思います。

この辺で、今日は北村先生からまたご講演をいただくことになっておりますので、私も一緒に勉強させていただきたいなと思いますので、よろしくお願い申し上げます。どうもありがとうございました。

◎石坂委員

ありがとうございました。

続きまして、刈羽村長、品田宏夫様、よろしくお願いいたします。

◎品田村長（刈羽村）

皆さんこんにちは、ご苦労さまです。

よもやこの会が周年事業をやらかすとは発足当時、夢にも思いませんでしたが、活動を続けてこられたこと、そして一定の成果を会として出してこられたことに、感謝と敬意を表したいというふうに思います。

案内文の中に設立当初の云々ということが書いてありまして、私もありがたいなと思いました。実は、ベルギー・フランスに行った時に、フランスのローカル・インフォメーション・コミッティという、そういう組織に着目を、私もしたし、当時の柏崎市長さん、西川さんもそこに着目をされていたということが事のきっかけだったわけでありますが、フランスはそのローカル・インフォメーション・コミッティの委員さんを県議会議長さんが職権で任命をするんです。日本だとちょっとそういう県議会の議長が何かを任命するみたいなのはちょっと想像しづらいですが。いろんな安全を守ったり、社会とのコミュニケーションをやっていく上に、これは原子力発電所だけではないんです。化学工場だとか、さ

まざまなものに対してそういう制度がかの国では整備されている。

今、当時のことを思い起こしたんですが、あの後、大合併の、合併の嵐が吹き荒れました。嵐と言っちゃうまくないですかね。そうやってこの国も政治だとか社会とのリスクコミュニケーションを初めとして、そういったものの形が変わっていくのかなと想像したりもしたところだったわけですが、それはあまり変わらなかったですね。そして、政権交代がこの１０年間で２回あったわけです。自民党から民主党へ、民主党から自民党へという中にあって、相も変わらずといいましょうか、私から見ていますと、いろいろなテーマ、例えば原子力発電所、化学工場なんかもそうなんです。フランスも同じように抱えているそういうテーマについて、我々国民ときちんとしたコミュニケーションがさまざまなテーマについてとれているのか。ここはまだまだ１０年前と何も進歩がない、私はそんな気がしています。

しかしながら、やっぱりそれはやっていくべきだと思うんです。そういうコミュニケーションをどうやってとっていくかという点において、私はこの地域の会というこの会の存在が非常に価値ある存在だと思っております。そして、どちらかというと、皆さんのこの議論を聞いていますと、科学的な、あるいは技術的な危険、安全といったところに流れていくといいますか、そっちがやはり議論しやすいというようなこともあろうかと思いますので、そういったところにウエートがかかっているなという感じをして私は見ておりますが、と同時に、やっぱり私たちは日本の、この国のエネルギー政策の最前線を走っているんだと思います。そこにおいて科学的、工学的な議論のほかにも、いろんな意味でやっぱり原子力発電、原子力というものと社会がどうコミュニケーションをとっていくか、そういったコミュニケーションの取り方、実はこれは北村先生、これからお話しなさるテーマかなというふうに想像するんですが、そういったことについてもこの会でもっともっとウエートを置いていろんな話をしていただけると、私は範たる会といいますか、他に先駆けて模範を示す、そういう活動ができるのではないかなと、そんなことも期待しているところでございます。

１０年という長い月日をこうやって山あり谷ありで越えてこられたことに本当に改めて感謝を申し上げ、今後の皆さんの活躍に改めて期待をしながらご挨拶にしたいと思います。ありがとうございます。

◎石坂委員

ありがとうございました。

続きまして、新潟県防災局、熊倉次長様、よろしくお願いいたします。

◎熊倉防災局次長（新潟県）

防災局次長の熊倉です。

皆さん本日はおめでとうございます。また改めまして、この１０年間の活動に敬意を表し、お礼を申し上げたいと思います。

思えば、毎月毎月日ごろの営み、仕事を終わられた後、夜集まられてということは非常に皆さんにとってもご負担大きいところがあるかと思います。しかしながら、こうやって継続して活動を続けていらっしゃった、このことについてまず御礼申し上げたいと思います。

もともと地域の会、この会の発足自体は、本日の資料にもありますけれども、平成１４

年当時の東京電力のトラブル隠し、これを契機として発電所の運営、地元に現としてある柏崎刈羽発電所の運営状況、これを透明性高く、地元の住民の皆さんの目線から何とか透明性高くしていくことができないのかということで考えた結果として一つの試みとしてスタートしたという経緯がございます。

そうした中で、この１０年間の間にはもともと発足した当時の活動から、さらには中越沖地震ですとか、あるいはその後起こった東京電力のデータ改ざん、あるいはその後、東日本大震災等を受けて、さまざまその時々、テーマとなることはあって、活動の様態というのもその折に応じて変わってきたところはあると思いますけれども、こうして１０年目の節目を迎え、これは非常に大きな意義あることだと思っております。そうした中で、今後もますます皆さん活発な活動を続けていただくことを祈念して、また、この活動がこの地域に浸透して、会だけの活動にとどまらず、地域の中にしっかり根差していくことを祈念して私の挨拶とさせていただきたいと思います。

本日は皆さん、大変どうもおめでとうございました。

◎石坂委員

ありがとうございました。

続きまして、原子力規制庁、中島課長補佐様、よろしくお願いいたします。

◎中島政策評価・広聴広報課長補佐（原子力規制庁）

原子力規制庁の中島です。

柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会１０周年に対しまして、お祝いを申し上げたいと思います。

私自身は、直接は地域の会にこういう形で参画させていただいたことはなかったんですが、以前、新野会長に何かのパネリストになっていただきまして、その場の会場に私も一員として参加をさせていただいた際に、この地域の会の発足当初のご苦労について、先ほど会田市長が言われたような、１０年もつのかなとか、または当初についてはなかなか会長、副会長が選任できずに柏崎市の部長に会の運営をお願いしていたとか、またその後、部長さんが交代された後、どうやって会長・副会長を選任するかとか、そんないろいろなご苦労が創成期にあったというふうにお聞きした記憶がございます。

この地域の会につきましては、設置目的として「事業者などの必要にして十分な情報提供に基づき、発電所に係る安全についての状況を確認し、地域住民の素朴な視線による監視活動を行うこと」を目的と聞いておりますが、私が今おります原子力規制庁におきましては、やはり原子力規制委員会の設置法におきまして、その基本方針というのが定められているところでございますが、この設置法の中におきまして、情報公開ということが定められております。そこでは、原子力規制委員会は国民の知る権利の保障に資するため、その保有する情報の公開を徹底することにより、その運営の透明性を確保しなければいけないと、そういうものです。

この方針を踏まえまして、我々の組織におきまして原子力規制委員会では、原子力規制委員会が行う会議、会議の資料の公開ももちろんのことでございますが、会議については原則公開としまして、またその会場に来られない方につきましては、Ｙｏｕ　ｔｕｂｅとかニコニコチャンネルを使ったような動画の配信、また週３回の記者会見、こういうものにつきましてもホームページなどに直ちに公開するとともに、積極的に情報公開に努めて、

透明性を図ることを心がけているところでございます。

また、原子力規制委員会の組織につきましては、ご承知のとおり、今国会におきまして、原子力安全基盤機構が廃止され、原子力規制委員会に統合されるということにつきましてはご承知かと思いますが、今後とも引き続き、原子力規制の行政に対する国民の信頼が確保されるよう、積極的に我々としては情報の公開に努めていきたいと思っております。そういう面では地域の会と相通ずるところがあるのかなというふうに思っているところでございます。

今後とも原子力規制庁としては、原子力安全・保安院時代からこちらのほうにおります柏崎の事務所長、今で７代目になるでしょうが、地元の声を聞きまして、原子力安全・保安院時代、それから原子力規制庁になってからにつきましてもいろいろ情報を聞きまして、我々としてもそれを参考にさせていただいておりますので、この場のいろいろな貴重な意見については、今後とも我々としては参考にしていきたいと思いますので、またいろいろよろしくお願いしたいと思っております。

規制庁の紹介になりましたが、私の挨拶とさせていただきます。

◎石坂委員

ありがとうございました。

続きまして、資源エネルギー庁、重村室長補佐様、よろしくお願いいたします。

◎重村原子力発電立地対策・広報室長補佐（資源エネルギー庁）

資源エネルギー庁原子力発電立地対策・広報室の重村と申します。

本日はお招きいただきましてどうもありがとうございます。まずは、この会が１０周年を迎えるということで、まさにいろいろとご尽力いただきました新野会長様、それから委員の皆様、それからご参加等々してご協力をいただいた地域の皆様方に敬意を表したいと思います。

まさにこの地域の会は、先ほども言われておりますように、いろんな原子力発電に対してご意見、お考えをお持ちの方たちがそういうものの垣根をまさに超えて、ひざを突き合わせて情報交換を行い、相互の関係を深めて理解をし合っていくというような会ということで、その中で私どもも、例えば現地事務所の所長、それからテーマテーマごとに私ども本省から担当者を参加をさせていただいているところです。そのような会が１０年間、まさに続いたという、毎月行われているというふうにお聞きしておりますので、その継続をもってこの会の存在意義の大きさというものがうかがえるのではないかと思っているところです。

まさに私ども資源エネルギー庁といたしましては、現在、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故の教訓を踏まえて、いろいろな関係者の方とのリスクコミュニケーションの重要性について非常に痛感をしているところでございます。まさにこれから私どものほうとしては、これからの国のエネルギー政策、それから原子力政策について皆さんに情報をご説明をして、意見をこれから聞いていかなければならないというふうに思っておるところです。

今後ともぜひよろしくお願いいたします。今日はどうもおめでとうございます。

◎石坂委員

ありがとうございました。

それでは最後に、東京電力株式会社、横村所長様、よろしくお願いいたします。

◎横村所長（東京電力）

所長の横村でございます。

福島第一の事故から２年と８カ月になろうとしております。まだまだ福島の皆様を初め、大変多くの方々にご心配、ご迷惑をおかけし続けている状況でございます。改めておわび申し上げたいというふうに思います。

また、福島第一では汚染水の問題、あるいは雨水対策の問題等々が引き続き発生している状況でございまして、この件につきましても大変多くの皆様方にご心配をかけている状況でございます。重ねておわびを申し上げたいというふうに思います。

我々が福島第一から放出してしまったセシウムのせいで大変多くの方々が避難を余儀なくされて、まだご帰還の目途もたっていないという状況でございます。大変申しわけなく、そして心が本当に痛む状況が継続しております。我々発電所といたしましては、かような事態を絶対に起こさないと、理由のいかんを問わず、二度とあのような事故を起こさないという強い決意でこの２年８カ月所員一同、そして協力企業の皆様方にも大変なご協力をいただきながら、安全対策、まい進してきたつもりでございますが、これからもより安全に、これを心がけてしっかりと発電所を運営してまいりたいというふうに思いますし、また、透明性の確保はもちろんのこと、我々がやっていること、あるいはやろうとしていることをやはりわかりやすく皆様方にお伝えする努力も引き続きやってまいりたいと思っているところでございます。これからもしっかりやってまいりたいと思いますので、引き続きのご理解、ご指導をいただければというふうに思います。

最後になりましたけれども、平成１４年の当社の不祥事によりまして、この地域の会が発足いたしました。あれから１０年、本当に新野会長初め各委員の皆様方、そしてこの会を支えてくださっている事務局の皆様、そして関係者の皆様方の大変なご努力とご尽力に心より敬意を表させていただきたいというふうに思います。我々、先ほども言いましたけれども、透明性、それからわかりやすさ、こういったものをしっかりと、できる限りこういったものにしっかりとやっていくという覚悟でございます。ぜひこの会を通しましていろいろと勉強させていただき、また我々発電所でしっかりやってまいりたいというふうに思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今日は本当におめでとうございました。

◎石坂委員

ありがとうございました。

それでは続きまして、当会の会長、新野良子より本日の公開勉強会の趣旨説明も兼ねてご挨拶を述べさせていただきます。

新野会長、よろしくお願いいたします。

◎新野議長

今日は１２５回の定例会の日に当たりました。とても秋晴れでこんな会議室にいるよりは外でいろいろなさりたいことがおありだったでしょうに、大勢の傍聴の方も含めまして、ご参集いただきまして誠にありがとうございます。

今年の春がちょうど１１年目のスタートで、今年の４月いっぱいで丸１０年を迎えました。昨年の春か夏ごろだったと思うんですが、現事務局から、そろそろ１０年になるけれ

ど、何かしたいことがないのかというふうに言われたときには、そういう考えで１、２カ月先しか見て仕事をしてきませんでしたので、振り返ったら１０年って、それで何かするのかというときに、晴れがましい席は似合わないなというのが委員の総意だったと思います。最初、第一声では「そんなことする会じゃないよ」と言って一旦お断りしたんですけれど、よくよく考えてみますと、これは私たち委員だけの会ではないので、振り返ることももしかしたら後々重要かもしれないということで、今日のような設定をさせていただきました。

振り返ると１０年なんですが、本当に最初にご提案をいただいた、今日配らせていただいているんですが、「設置に向けての基本的な考え方」ということが多分スタートになっております。この考え方に基づいて会則がつくられまして、会則もとてもシンプルで幅広く読み込むことができるんですが、その中には私どもに対する自由度が相当含まれていたんだろうと思います。今日傍聴の方の中にも多分、ここの設立のときにご尽力いただいた方が数名お顔があるようですが、そういう方たちのお力が結集してスタートを見たわけです。

次にもう一つ配らせていただいた「活動のあらまし」の中を少し、後からで構いませんので見ていただければ、皆さんの細々とした、少し新たな認識を持っていただけるような内容も書き込んでいるかと思います。世界に類を見ない会だということをよく外の方からおっしゃられました。特におっしゃるのは、外国の方もそうですけれど、国内でコミュニケーションの研究をされている方によくそういうようなご指摘をいただきましたが、それが本来、何を意味しているのかは、私どもはよくわかりませんし、特に毎月毎月の議論は課題があってやってきていることですので、ここにいる委員の方も多分、そういう意識で毎月ここに議論の場を共有はしてこなかったろうと思っています。

もう一つは、オブザーバーの方もお仕事で参画されていますので、二、三年を期に変わられてしまうので、当初のそのことが全て継承されているとは思いにくいというところで、１０年を機として、やはり初心をきちんと皆さんと共有したいなというのが今回の勉強会の趣旨です。そこから１１年目にかけて変わるべきことがあれば変わりますし、続けるべきことがあれば続けていきたいなと思います。

今日をまた通過地点として皆さんがいろんなご意見やお考えをお聞きして、それから新たな一歩をまたみんなで歩んでいきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

今日は、北村先生が第三者的なところから私どもの会のことをいろいろ切り裂いてご説明をいただくんだと思うんですが、そして、私どももそれを理解しながら、皆さんと一緒にその中から何か新たな一歩が踏み出せればいいなと願っております。北村先生にはよろしくお願いいたします。

ご挨拶にかえさせていただきますが、しばらくの間、皆さんとともにお時間を過ごしたいと思います。よろしくお願いいたします。

◎石坂委員

それでは、公開勉強会のプログラムに入らせていただきます。

まず最初に基調講演でございます。「原子力に向かい合う対話の形をさがして」と題しまして、講師をご紹介いたします。

東北大学名誉教授、株式会社テムス研究所代表取締役所長、北村正晴先生です。

先生の細かいプロフィールに関しましては、皆様のお手元の配付資料をご覧いただきたいと思っております。本日、大変お忙しい中、我々柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会１０周年事業においでをいただきました。本当にありがとうございます。

それでは先生、よろしくお願いいたします。

◎北村講師

それでは、改めましてこんにちは。北村でございます。

ここに示しましたように、地域の会の１０周年に寄せていただきまして「原子力に向かい合う対話の形をさがして」という題名で講演をさせていただきたいと思います。中でおいおいお話ししますけれど、私自身も意見の異なる方々と、それから私のように原子力をやっていた人間と、要するに非常に原子力に否定的な方と肯定的な方、中間的な方、それから我々という形の対話の集まりというのを、ほぼ同じ時期に始めまして今日まで至っております。そういう意味で、形こそ違え、同様な活動をやってこられた地域の会の皆様のご苦労、大変さというのは、いささか理解できるつもりでおりますし、これを長きにわたって継続してこられた、１２５回、この数字にはただ頭が下がる思いでございます。

さはさりながら、やはりこういう対話の形というのは常に見直し、改善されるべきだろうとも思っておりますし、それからもしかしたら違う対話を行ってきた同士が意見交換することで、より大事なポイントが明らかになるかもしれない。そういうことも考えまして、今日ここに参上させていただきました。

お話をいただいたときに、やはり原子力に関する話はいつでも重いので、ちょっとどういうお話をしようかなと随分迷ったんですが、原子力の安全論であるとか、政策論よりも、まずはこの原点である皆さんの集まり、意見の異なる方々同士の対話、それが私のやってきた活動と重なりますので、そこに話を絞って暫時お時間をいただきたいというふうに思っております。よろしくお聞きください。

それから、お手元にＡ４の裏表がありますけれども、ここにお話しすることの骨子だけは箇条書きのように書いてございます。私もいささか原子力をやって実験をやったこともあるもので、どうしてもこういうチェックリストみたいな書き方にしてしまって、できましたら、私が話したときに納得できた項目には〇を入れて、納得できなかった項目には×なりクエスチョンマークなりを入れて、適宜後で、会のうちはなかなか質疑の時間とれないと思うんですけど、適当な機会にぜひ意見交換していただければなと思っておりますので、チェックリストをご利用下さい。

自己紹介を簡単に申しますけれど、私は東北大学の工学部卒で、もともとは原子力の人間ではなくて通信工学というのをやっていました。ですが、ある時期からやはり原子力に行って頑張ろうと思いまして、昭和３９年、もうえらい古い話をしますけれど、東海村の日本原子力研究所に、これは就職ではなくて学生として行って研究を始めたのが原子力とのなれそめでございます。それもいろいろな話をやっておりますけれど、やはり最近の活動は社会との対話ということで、とりわけ原子力立地地域の対話ということを行っております。

私どもの対話は、大学の若い先生方と数名で行って、これはちょっと写真が暗くてご覧になりにくいかもしれませんが、相手として集まっていただく方は、１５名とか２０名、

多くて３０名というレベルで、じっくりお話をさせていただいております。少人数の参加者の皆さんと実は繰り返し訪問し対話をするというのが、我々のやってきたことで、詳しいことは省略しますけども、そこにありますように反復して実施することで初めてお互いの理解が進むだろうと思いました。それから参加者や話題は基本的に限定しません。それからここが通常の考え方とは違うんですけど、内容は当面、非公開でやります。それから参加者主体の運営にしますというところで、多分こちらの会と大きな違いは、内容の非公開というところが大きく違うだろうとは思っております。その理由については後ほどお話しします。

もう正式の会のほかにこんな形でメンバーの方、これは一生懸命、原子力に対して批判的な活動をしておられる方のお宅ですけれど、そこに伺ってお話しをするとかいうこともやってまいりました。日本各地でやったんですけど、何といっても宮城県の女川町と青森県の六ヶ所村、この２カ所で、これは５年間、６年間ほどの実績をご覧に入れておりますけれど、大体初めのころは２カ月１回ぐらいのペースでずっと行っておりました。それぞれの場所に２カ月に１回ですので、私の側から見ると毎月１回、ちょうどこの地域の会と同じようなペースでいろんな話をさせていただいております。

大分基本的な相互の理解とか、認識の共有ができましたので、現在はお声がかかったときはいつでも行きますよという形にして、定期的に訪問することはちょっと間隔をあけておりますけど、それでも時折ご要望がある都度、参上しているという状況です。

少人数の対話だけではなかなからちが明かない面もありますし、また、そういう少人数の対話の中から、この後お話ししますけど、いろいろ私なりに感じたものもあったので、その知識を生かして、ここにあるような大きな４００人ぐらい入る会場での集まりというのもやりました。大学主催のものに次いで、宮城県主催のプルサーマル問題であるとか、資源エネルギー庁主催の高レベル放射性廃棄物に関するシンポジウムなども主催者としてやらせていただいております。今は資源エネルギー庁のシンポジウムを今年も、原子力に反対な活動をされている方々と、それから推進している人たちと、それから私、原子力をやっていたのでどっちかと言われたら推進派だといわれて仕方ないんですが、立場としては、場をなるべく公正に、なるべくフェアに運営する、そういう立場で、一応、私の意見は申し上げませんという形で参画しております。今年もやっています。これらの実践を通じて、対話というものについていろんなことを考えてまいりました。

対話に踏み切るに至った背景ですけど、もう皆さんここにいらっしゃる方はよくご存じのように、原子力施設のトラブルというのは１９７０年代からいろいろ起こっているわけです。ただ、やはり私にとってはＪＣＯ事故が決定的でした。やはりお亡くなりになった方が出ているということとか、風評被害も大きかったですし。ＪＣＯ事故の後、対社会説明責任を痛感いたした次第です。その中ではいろんな出会いがあって、ここにちょっと項目だけ書いていますけど、原子力学会で参加された大学４年生の方が、どうして専門家の人はもっと社会に出て語らないんですかと、バイトの学生さんなんだけど会場で発言されたり、それからネットの上の記事を見ると、ほとんどが原子力に批判的な方の意見だけが出ている。じゃあやってきた人たちはどうして何も言わないのだと。何か言うことがあるだろう。言わないで沈黙しているのはどういうわけだという意見が非常に強く出てきていました。そういうことを含めて、いろいろ試行錯誤した末に２００２年から始めたという

ことです。

２００２年に、我々が始めたのは９月５日なんですけど、その直前の８月２９日にいわゆるデータ隠し問題が起こったということです。それがどんな対話活動を行ってきたかという前段階なんですけど、ここから先が対話活動を通じて得られた、ここでは「実践知」という言い方をしております。どういうことを私どもが学んだかということです。

容易にご想像いただけるように、地域に行くと非常に多種多様なご質問、ご批判をいただきました。端的に言うと多様な問いとか、専門家への怒り、否定の表明とかいう言葉にたくさん接しまして、研究者生活では全く体験しなかった話なわけです。具体的に言うと強い不安や不満や怒りへの直面がありました。想像を超える広いテーマへの対応が必要だということもわかりました。そして「原子力」に関しては多様な批判があって、一度聞いたぐらいでは理解することが困難だということも痛感しました。その中では、いわゆる「科学的説明」だけではとても足りないなということも実感しております。

また、いろんな地域では「すみません、参加者の方々、時間が限られていますので、お一人２分ぐらいでお話しいただけますか」と、マイクを向けても２分なんかじゃ全くおさまらない。「すみません、意見を簡潔にまとめてお話しいただけませんか」と言っても、「そんな話じゃない」と。「発電所でデータ隠しが起こっている、ひびがないと言っていたものがひびがあるじゃないか、どうしてくれるんだ」という思いが噴き出すように出てきて、とても２分で話してくださいなんていう制御は効かないような状態も経験しました。

そういうことの中で、自分は非常に難しい場に足を踏み入れてしまったなとは思いつつも、でもそれだからこそ、こういう活動というのはきっとやらなければならなかったんだと。今までやってなかったのがむしろおかしかったんだということを実感した次第です。

念のため、実践が始まる前は、私は何を考えたかというと、多分平均的な原子力技術屋はこう思うんですけど、原子力発電の客観的なリスクは十分小さいと。原子力事故と言われている、さっきご覧に入れたようないろんなトラブルは、実際には小規模な故障や誤りが多くて、本当の大事故なんていうのはなかったじゃないか。リスクゼロはあり得ないんだから、そこをちゃんとご説明すればいいんだろうと。また、特定のリスクを排除すれば別のリスクが生起するリスクトレードオフという現象があるので、そういうことを理解すればいいんだろうというふうに、どっちかというと技術屋としての専門の知識をわかりやすくお話しすればそれでいいんだろうというふうに思っておりました。

でも、何回か現地にお邪魔してお話しする間に、参加した住民の方々もいろいろと考え方を変えていただいたんですけど、私自身が自分の考え方を大幅に変えざるを得なくなったということが驚くべきことで、私以上に私と一緒に行った研究パートナーの若い人たちが、先生のしゃべり方はこの３、４回で全く変わってきたというようなことを言ってくれるわけです。そういう中で、なるほど、私は考え方を変えたんだなということを本当に実感しましたし、それを整理していろんな形でまとめております。

これはでも福島事故以前の話で、私は以前でも地元の方、皆さんと対話して自分の中に変化を認めたというお話をしましたけど、福島事故以降は根本的な認識の変更をしなければならなくなったわけです。これについてはこの後、またお話ししますけど、ここで言っていたような原子力発電の客観的リスクは、社会で受け入れられていいほど小さいんだなんていうことを限定なしにしゃべることは到底できなくなったわけです。そういう意味で、

できなくなっただけではなくて、そうしゃべってきたことに対する自分としての非常に深い慙愧の思いと、それから話してしまったことに対する深い反省というのは、とても重い気持ちで受け取っておりました。

少し具体的に印象に残る対話の例をお話ししますけど、多分こちらの地域の会でも共通面があるんではないかと思うんですけど、住民の方に「立地地域に暮らして不安を感じることはありますかありませんか」という問いをしました。そしたら「不安だといつも思うなら、ここには暮らしていない」というお返事があったので「ああ、そうですか。日常的に強い不安をお持ちなわけではないですね」と能天気に返事したら、「だからといって安心しているとは思わないでほしいんだ」と言われました。例えば、消防自動車が発電所方向に向かったとき、上空を報道のヘリコプターが飛び回るとき、何が起こったのかと、非常に心配だと。ある場所では「これっきり家族と会えないんじゃないかとさえ思うんだよ、私たちは」という話も聞いております。

また、別な場所では、消防自動車が行くような時、火災発生の町への知らせは以前よりは確かに早くなったかもしれない。でも鎮火の知らせが遅過ぎると。火災が起こったという情報はくる、鎮火の情報は遅い。我々はその間、ずっと心配しているんだぞというような話もお受けして、私、もちろん行政の担当者ではないんですけど、そういうことについて、知らないままに原子力発電所を受け入れてくださいなんていうことを言っていることの無神経さというのはあるなというふうに感じた次第です。

この火災の問題については、事業者の方の説明は、多分東京電力さんもよくおわかりのように、火災発生の報告は警報が作動すれば自動的に行ってしまいます。だけども鎮火の判断は消防署の方に来ていただいて現場確認していただかないと判断できないので、自分たちではできないんですよ、だから時間がかかるんですというご説明をいただきました。それはその限りにおいて理解はできます。でも、その間、地元の方々が不安だということについては、じゃあどうしたらいいんだろうかという点で、さらに考えなければならない問題があるだろうというふうに思いました。

この点についてもやはり、いろんなルールの見直し、合意の見直しというのは必要なんでしょうけど、大事なポイントは、やっぱり地元の方が心配する必要のないところで長時間心配されるということは、どうしても避けなければいけないんではないだろうかというふうに考えた次第です。

また、別な対話の例ですと、住民の方から発電所の定期検査にかける日数は明らかに昔から比べると減少していると、大幅に減っている。安全の切り捨てではないのかというような話もあって、事業者の方は、いえ、いえ、とんでもない。安全を切り捨ててはいませんと。必要な点検や交換作業は確実に行っているよというご説明があったわけです。そういうのを聞いていると、普通にああ、そうかなと思う節もあるんですけど、それに対してさらに次のコメントで、いや、ちょっと待ってくれと。今の時代どんな分野だってコスト削減が求められているじゃないかと。そうしたら、どうしても昔より手を抜かざるを得ないような状況が発生しているんじゃないか。質問者のある方は、「私は小さな会社を経営している、技術系の会社を経営している。やはり、経費削減のためには抜ける手は抜きたいと強く思う。電力さんはそう思わないのか」というような話をされるわけです。こういう実態ベースの討論をもっとやる必要があるだろうなと、強く思いました。こういう質問

はなかなか大学だけにいて、研究だけしている人間にはできることではないので、目を開かされた思いでおります。

とりわけ、これは特筆に値する経験だったんですが、専門家、私どもの説明で、安全に関してはご心配もあろうと思います。しかしこれまで、これは福島事故以前の段階の話です。これまで日本の国内では重大な事故は起こっていません。ご安心いただいてよろしいと思いますという説明をしました。そうしたら住民の中のある方が「先生、それちょっと違うんじゃないか」と反論がありました。「安全というのは、これまでの実績だろう。事故が起こらなかったというのは、これまでの実績だろう」「今日まで事故がなかったという理由で明日の安全が保障できるのか」というふうに言われたんです。最初、「だってずっと安全だったんだから、これからも安全だと思っていただいてもいいんじゃないですかという思いがふっとしたんですけど、ちょっと待てと。これは理屈から言えば完璧にこのコメントのほうが正しいなと私は思いました。過去の実績が未来への保障にはならない、この指摘は論理的に正しいと思います。したがって、これとは別な説明の枠組が必要なんではないかなということをここでは痛感しました。

こんないろんなことを思いつつ、対応を続けてきたんですけれど、少し話を飛ばします。

意見が食い違うこともあるんですが、例えば、これはある地域でこういう話を聞きました。どうして立地地域だけがしんどい勉強や討論をしなければいけないのかと。それから、この地域が取り上げられるのは、お金の話か事故の話だと。とてもいい地域なのに残念だという話も聞きました。これはいろんなところで聞く話ですけど、原子力ができたことで地域コミュニティの中で話せないこと、いわゆるタブーができてしまった。推進・反対で立場の異なる人とは話もしなくなった。原子力について語る場所がないという話があったんです。

それで、私どもが押しかけ同様に言った対話の場には、たまたまお願いして来ていただいたいわゆる推進論の方と反対論の方が両方同席していただいたんです。それに対して「この対話では立場が異なる人たちとも話すことができた。立場は違っても、この地域の子どもたちに明るい未来をつくってあげたい、その思いは共通だったということを私たちは知った」という発言をいただきました。これはやはり、意見が違っても共通の、掘り下げれば共通のものは見い出せるんだという意味で、とても印象的な意見だったというふうに思っております。

同様なことを高レベル放射性廃棄物処分場の問題についても感じておりまして、これ実際には、推進派の杤山さんという東北大学の先生と、それから反対派で有名な小出さんに来てもらって、１３時から１７時半という長丁場で議論していただいたんですけど、この場合も意見は一致しないんですが、どちらも相手がこういう難しい場に来てくれたことはありがたいと。それから、意見が異なる講演者の話を聞ける場は必要だと、こういうことについてはお二人とも強く合意してくださいましたし、かといって互いの意見に同意するわけではない。しないけれども、相手の主張を傾聴する時間は共有した、これはとても貴重な場であるということもお二人からいただいております。参加者も皆さん、そうおっしゃっていただきました。

専門家は真摯に説明すること。それを受けて判断するのは専門家ではない、国民の役割だと。こういう見方も共有したと思っております。最終的に判断するのは国民の役割で、

それを実際には付託を受けて政治家が判断するのかもしれませんが、いずれにしても専門家が最終ジャッジではないということはとても大きいことだと思っております。

ここにごちゃごちゃと書いてありますが、要は、こういうお話を全ていろいろ項目でくくると、原子力に関しては、いろんな負の思いが地域にはある。マイナスの負の思いがある。そこに、さらにコミュニケーション要因が思いを複雑化する。やはり素人の感覚にも合わせた表現をしてほしいとか、もっとわかりやすい説明をしてほしいとか、こういう資料を持ってきて説明するというのはわかってほしいという気がないのではないかというふうな厳しい発言も聞いております。

原子力紛争の本質についてはその後、随分考えました。このスライドでは右と左が対比されているんですけれども、批判的な方が「トラブル続発しているじゃないか、けしからん」とおっしゃると、推進している側は「トラブル対策は進展しているんだよ」と。「事故は避けられないぞ」というと「事故の防止は可能だ」。「電力事業者の組織風土は変わらないじゃないか」というと「いや、組織風土は向上しています」「発電費についても処分費を入れるとコストは高いじゃないか」「いやいや、それを含めても発電コストは十分安いです」と。「電源は集中大規模型から分散型に進化すべきだ」という意見に対しても「いえいえ、やはり大規模安定な電源は必要なんです」。あとは再処理工場にしてももんじゅにしても、みんな意見は全て対立する。１個ぐらい逆になった部分があってもいいと思うけど、全て対立する。ほかの面でもそうです。

ということは、いろんな事実を集めて科学的に判断すると正しい結論が得られると、よく人は言うんですけど、本当にそうなのかな。別にどっちも間違いではなくて、何を見ているかなんではないのかなと考え始めました。事実認識というものは、人によって違うし、それはその人の持つ信念体系によって結果的に違ってくるんではないかというようなことを考えるに至りました。ここはちょっと簡単に申し上げると誤解があるかと思いますけど、今日配付資料にも書いてありますけども、時間も限られているので、私の言葉はもしかしたら言葉足らずで誤解を招くかもしれません。でもあえてこれも出させていただいております。もしあれば、後でまた、パネル討論の中で、パネリストの方などに突っ込んでいただいて、そこを修正できればなと思っております。

一応、どちらも正しいことを言っているというふうな主張をされるけど、その基本には信念体系、あるいは価値の体系、価値判断の違いがあるんではないかということを我々は考えるに至っております。

ここは非常に貴重な勉強をさせていただきましたので、私としてはいろんな学術的な会合でこれは発信しております。電力の方にもお話ししていますし、行政機関の方にもお話ししております。一応、仕事ですので、いろんな著作物もつくりました。でも、その中で私自身が自分たちの活動を顧みて一番特記しておくべき一つの到達点は、こういうふうなことを福島事故の前にある本に書いております。市民感覚に真摯に向き合って、専門家の経験からは考えにくかった事故のシナリオ、これを施行実験的に想定し、その防止策を考えるような方策も検討されるべきであろうということを私、２００９年の本に書いているんです。

何か自分で今さら、証文の出し遅れみたいな話をしているんですけど、あえてこれをお出ししているのは、反対論の方と向き合って、例えばさっき名前を挙げた小出さんという

のは、ものすごい厳しい批判をするわけですけれど、その批判を丸のみする必要はないにしても、その方の質問に「そんなことは起こりません」と答えていたのが今までの安全論です。それではだめで、起こってもこういう形で対応しますというのでなかったらいけなかったし、そこの部分は「起こりません」でとまったから、世間で揶揄される、いわゆる想定外ということが批判として言われるんではないかと思っております。あとは、地震は、自己批判も込めて、それは「想定外」というより「思考停止」というべきだし、また想定外というよりは「想定除外」だったのではないかというふうにも考えております。

こういういろんなことをわかったつもりだったんですけれども、こういう対応努力はさらに福島事故を経て、大きく変更せざるを得なくなったと思っております。今までのお話ししたことの中で対話が大事だとか、相互理解が大事だとか、意見の違う人の中でも共有できる部分はあるということは変わらないと思っております。変わらないと思っておりますが、やはりいろんな部分で大きく変えなければならないものもあったなというふうに思うわけです。

では、福島事故を経験した後における対話の課題というのは何になったのか。対処の方向性としてはどういうことが今、見えているのかというお話を次にいたしたいと思います。

対処の方向性といっても、とても難しい問題ですから、そんなにばっさりと、こうすればいいんですというような処方箋が書けるはずもありません。ただ、今までと違ってどういうことを考えなければいけないか。少なくとも原子力をやっている人間はどういうことを考えるべきで、市民の方々との対話、向かい合いにおいてはどういうことが必要なのかということについて私どもなりに気がついたことを次にご紹介します。ですからここからちょっと話は変わります。

福島事故の後の基本的な立ち位置を説明します。これは原子力をやっている側の立ち位置と私が考えていることです。事実その１は、市民の多くが技術の発展、しばしば暴走に懸念を強めていると。実は、福島事故が起こったからではなくて、福島事故が起こる前から技術の暴走というのは非常に心配されてきたということをもう一度振り返って考えるべきだろうなというふうに思います。

それから、技術が発展し過ぎた結果、技術の制御も、技術に関する社会的問題の解決も後手に回っていると。技術の発達がある意味で非常に急速であったと。社会制度、例えば今回まさに不十分だったことが露呈した防災、避難の問題なんていうのは、まさに社会側のあり方です。そういうことも後手に回っているので、懸念はさらに増大する。ここの事実１と２までが福島の事故前でもこうだったという話です。福島の事故はこの懸念を極限まで拡大させたと思います。当然ながら、原子力の立場は危機に瀕していると思います。

「再稼働しても大丈夫安全」という話が今いろいろなところで起こってきております。それは、原子力人はそう確信できて当然だし、できなければ困ると思います。しかし、社会がそれでなお不安だということも、これはまた当然であって、ここを埋めていく必要があるんではないかなというふうに思います。

方向ですけど、懸念する国民の納得を得ること、これは極めて困難です。原子力人は真摯な実践とそれから説明ということを、今まで以上に充実していただく必要があるだろうと思います。このごろ電力の方も、それから行政の方もコミュニケーションが大事だということはよくおっしゃっていただいていると思います。それ自体は指摘として正しいと思

うんですけど、正しい言葉を言うことは多分できて、でも、それをどう実際に埋め込むか、実践に埋め込むかというところが鍵なのではないかなというふうに思います。その実践に関して言うと、技術及び組織面ですが、原子力発電所の安全性を格段に向上させること、それは当然です。そして、再稼働判断はその実態が理解されることが大前提でしょう。

よくある議論に、再稼働なしでは巨額の燃料支出が経済を圧迫するとか、電力料金が高騰し、日本の産業が空洞化するとか、あるいは立地地域の産業に大きな痛手があるとかという懸念が表明されます。それはそれで理解できる、一定の正当性はあるでしょう。しかし、私の思うには安全性、または関連するリスクですけれど、それと経済性の議論は前者、安全性の側に国民が納得しないまま同列で議論することはできないんではないかというふうに思います。最終的に同列に議論してもいいんです。リスクと経済、あるいは経済的な利点、比較して議論したって、最後はいいかもしれない。しかし、まずは安全性について、それが受け入れられるレベルまで安全だということについては、ご了解が得られてないといけないので、今の段階で同列ではないんではないかなというふうに思う次第です。

これは各電力さん、福島第一事故以降の安全向上策というのはいっぱい公表しておられます。もう本当にいろんなことをやっていらっしゃいます。これはいちいちご紹介しないんですけど、極めてたくさんのことをやっておられる。まだ十分でないというご意見の方もたくさんいらっしゃると思います。ただ、私としては、これだけの向上策のうちの何分の１かでも仮に福島事故の前に導入されていたならば、きっとあの事故のシナリオはよほど違ったものになっただろうと、これは間違いなくそうだというふうに思う次第です。それは、非常に何とも言えない思いで、悔やんでも悔やみ切れない思いですし、決してさっき私が自分の書いたこととして引用したことを、私は物が見えていたというふうに威張って言うんでは全くないんですけど、反対されている人の意見にも応えて、それでも対応できるんですよという説明ができるような努力をもし５年前にしていたら、６年前にしていたら、状況は違ったのになと思うと、裏を返せば対話し、相手を理解し、理解できた分については実際の行動を結びつけるということが重要なんだということをこの事故の結果と、その対応策を通じても痛感している次第です。

今、いろんな事業者の方々が各地でなさっている技術的説明は、それは事実だろうと私は思います。しかし、ここにちょっといささか不謹慎な漫画を描いてあるんですけれども、ここにいるのは猛獣が檻に入っている写真です。ここで説明者が「頑丈な檻を何重にも設置しました。大丈夫です。ご安心ください」という説明をしているイメージ図です。これは多分、技術的にはそうでしょう、多分。でも根本問題は話し手とその組織は信頼できるのかということですよね。私は技術をやった人間ですし、電力会社、東京電力さんももちろんそうです。それからほかの電力さんにもいろんな卒業生が行っています、親しい人もいます。

したがって、一定、ちゃんと信用できる方々だとは思っているんですが、一方で、でもそういう信用できると思いたい人方がいっている組織で、必ずしも今まで社会の期待に応えるような結果が出てこなかったのはなぜかということは、やはりしっかりと考えを詰める必要があるんではないかというふうに思っています。なので、その信頼の実証という部分は極めて大きい課題ではないかなと思います。

信頼の再構築なしには原子力と国民の共存は困難です。困難であっても信頼の再構築し

か道はないです。その第一歩はやはり、対話だろうと私は思います。対話の不在、または狭い村への閉じこもりが福島事故の背後要因であると、こういう見方は国会の事故調査報告書や民間の事故調査報告書、いろんなもので指摘されているところです。報告書の個々の指摘については、もしかしたら異議申立をされたい方もいるかもしれません。でも全体として見たときに、やはり一言で言うとコミュニケーションの不在というのは大きな問題であったんではないかなと思わざるを得ないと思います。

困ったことに今、私は、信頼の醸成のためには対話が必要だと言った口の下から変なことを言いますけど、でも対話の成立のためには信頼が必要なんです。だって、さあ対話しましょう、お互いに理解を深めましょうと言っているその口の下から相手が信用できなかったら、その対話は意味ないじゃないですか。だから対話はとても厄介で、どうしようかというときに唯一私が見い出すことのできたささやかな解決法は、繰り返しやるしかないでしょうと。１回ではとても信用できないでしょう、繰り返しやりましょうということです。そうお考えになってかどうかは背景の事情は知りませんけど、こちらの会も結局、繰り返し繰り返しなさっている。そのことが対話の成立に、どのぐらい完全か不完全かは知りませんが成立につながる。それが遠くめぐりめぐって、多分信頼につながるんだろうと思っています。簡単ではない。迂遠かもしれません。でもそれしか道はないように私は思います。

そう言ってしまうと、対話しかないんではないかというのも乱暴なので、多少改めて考えるべき問いということで、信頼とは何によって決まるのか。信頼を回復する方策はあるのかというのを、多少、学問的にも検討してみました。

これについては、私は原子力の人間であって心理学の専門家ではないんですけど、一応原子力の中で私は「人間と機械」というテーマで仕事をしていたので、多少の認知心理学とか、そういうところの勉強はしたつもりです。その中で非常に評価の高い方々のご主張では、信頼というのは、信頼が醸成されるためには相手が信頼するに足る能力を持っているということが信頼できなければいけないし、同時に、動機づけとして正しい動機づけを持っておられるということが受け取れなければいけないというふうに言っておられます。これは、例えばお医者さんにかかる場合なんていうのを想像していただければおわかりかと思うんですけど、お医者さんに対する信頼が形成されるためには、そのお医者さんが能力があることがわかってなければ心配でしょう。同時に、そのお医者さんが能力はあっても例えば金もうけ治療とか、よからぬニュースが出ることもあるじゃないですか。それに対してそんなことはない、良い治療をしたいという動機づけもちゃんとしておられる。この両方があって初めて信頼ができるんだというのがこの北大の山岸先生とか、同志社の中谷内先生という方のご意見です。これは国際的にも評価が定まっている考え方です。

さらに最近では、こういうものの背後に価値共有というのがあるなと。私たちは同じものを大事に思っているんだなという思いが共有しないと、共有されないと結局、信頼はできないというふうなお話が出ております。

価値共有ということですけど、やはり同じものを大事に思う。同じ共通の善といいますけど、共通善をお互いが持つんだということが大事だと思います。さっきの例で言うと、不十分ながら原子力に反対する方も賛成する方も、この地域の未来、子どもたちのために明るい地域をつくりたいんだよという点では全く共通している。不十分かもしれないけど、

そこが出発点になるというふうに私はそのとき思いました。価値共有の認知というのは、例えばそういうことです。

どうしたら動機づけや価値共有について、認知を高められるか。とりわけ福島のような事故が起こった後です。価値共有しましょうとか、信頼してくださいとかといってもなかなか難しいじゃないですか。それをどうするかということについても、この先生方が提案しておられて、なかなか厳しい提案なんですけど、一つの例としては監視と制裁体制の導入だということを言っておられるわけです。

この山岸先生なんていうのは恐ろしいことを言っていまして、私がこの人間がうそをついてないということを信用するにはどうしたらいいかと。うそをついたら針千本飲ますという冗談がありますけれど、仮想的に針千本マシンというものをつくって、その人間に装着しておけば、きっと、うそはつかないだろうと私は信用できるって。これがとても残念なんだけど、監視と制裁体制による信頼だというような話もあるわけです。

それが望ましい姿なんて私は全く思わないんですけど、でも信頼が今のままで得られないのだったら、じゃあ何なんだと。今多分、規制庁の方もおられるわけですけど、やはり規制をもっと厳しくしてくださいという声がいろんなところで聞こえるのは、多分これにつながる話だと思うんです。それはそれで一つの、だからこの先生方の学術的なご提言にも整合していると思います。ただ、ここでとまってはいけないというのがここから先の話です。ここでとまるつもりは私はありません。監視と制裁体制の強化で信頼を得るなんて、やはり嫌じゃないですか。だからそれは学術的にそういうことをおっしゃっているだけで、現実はそれでは困るんです。

さて、自分のほうの経験ばかりをお話ししてきて、ちょっと一方的で申しわけなかったんですけど、ここから、じゃあ今度は私が地域の会の活動に接してどういうことを印象を持ち考えるに至ったかというお話を少しさせていただきたいというふうに思います。

私、こちらに参加したことはないんですが、皆さんよくご案内のように、かなり詳細な会議録が公開されている。一応、第１回から読ませていただきました。１２４回を全部精読したかというと、し切れてない部分はあるんですけど、とてもいろんなところで目に触れる、あるいは場合によると目からウロコという思いもしたご発言をいただいております。

まず最初の第１回の会議録で、やはり真っ先こういう話がありましたね、ご記憶でしょうか、１０年いらっしゃる方。「そもそも会場の選択についてもっと気配りをしてほしい」と。何でここなんだという話があったりしました。いや、そんなこと気にする必要ないじゃないかというご意見もあったんですが、私はこれはすごくわかります。私どもがやはり地域に行って、宮城県とか青森県の地域に行ったとき、どの会場でやるんだということは、参加される方はすごく意識されますよ。思えばやっぱり今のサッカーでいうホーム＆アウェイみたいなもので、やっぱりホームでやりたい、どっちもホームでやりたい、それではだめなんで、中立的な場所でやるしかないだろうというのは、やっぱりそうなんだなと改めて思いました。

あともう第１回から「私はかなり反対で、かなりかたくなな団体のものだと思われているかもしれませんけど、しなやかな議論をしたいです」というご発言もありました。非常に見事なご発言だと思います。あとＪＣＯの事故に言及した発言もありました。「東京電力の皆さんもいつもコマーシャルでいっておられるようなことを実態として行われるよう

に、本当にそうなるように願っております」とか。それから遠慮がちに、「非常に未熟であり、傍聴席などにたくさんの方がおられますと発言しにくい」という、そういうご意見もありました。

ここなんです。実はだから私どもは自分たちの集まりを発言非公開でやっているんです。地域というのは狭くて難しいんです。やっぱりぶちまけたことを言うには非公開のほうがいいという話もあって、こちらの公開はちゃんと筋が通って、それはそれでよろしいんです。ただ、場合によると非公開も必要だなと思っていたら、そこら辺はこれからいろんな試行錯誤をやっていかなければいけないんですけど、どっちがという話ではない。さきほどお役所のほうで、公的な会議は公開だと。これはそうだと思います。それは当然それでいいと私は思っていますが、でも、ここら辺も第１回からそういう発言をされている。「賛成の人も、反対の人も、その組合を代表する方ですけど、常にそれが連合の方針かどうかということについては、すぐ結びつけないでいただきたい」というような発言もありました。これも古い方はどなたの発言かきっとご記憶なんだろう思います。「誰も先行きはわからない、下手すると空中分解ですね」という発言は何度かいろんな方から出ています。こういう空中分解の恐れを持ちながらそれを切り抜けて今日に至ったということは、本当に大変なことだというふうに思います。

また、これがやはり別な方のご発言で、これはもう少し、２カ月ぐらいたった後です。これは準備会に参加されなかった委員と事務局の方が、やっぱりちょっと考え方のギャップをすり合わせるためにやったという。定例会じゃないですね、これは。そこで「非常にしゃべりにくい」と。「しゃべりにくい会だと感じている。マイクで話すこと自体に抵抗がある。マスコミの同席もプレッシャーに感じる」というようなご意見もありました。それはそうだと思います。

これはちょっと長いご発言なんですが、「ここでやる議論によって原発側がどれだけここの議論を吸収し、自分たちの透明性を高めるために努力しているか。そして、それが私たちの目にも見えてくる。そしてまた次の議論へと発展し、また東電を動かす、そういうことが地域の住民にも見えていくようにすることがこの会にとって非常に大事かと思う」と。非常に的確なご指摘があったし、それから人によって原子力技術に対する理解が違う、レベルが違うという話が出たときに、「レベルを合わせてという話もあるけど、レベルなんて合うわけがない」と。「それを合わせようとするから無理がくるんで、このメンバーでも慣れてきて会話を重ねれば話しやすくなるだろう」と。こういうことも難しい原子力についての市民と専門家、あるいは事業者、行政と地域の方の話をするために非常に大事なポイントだと思います。

「どうもともかくなるほどというふうに見えない」とか、「後からつくったのが壊れているのに何でこれだけ異常なしというのか理解できない」と。「そこら辺が、みんながわかるような説明をしてもらえれば」というご発言がありました。これは要するに柏崎は幾つも原子炉があるんだけど、後からつくったものが壊れているんだったら、古いものはもっと壊れているんじゃないかと、それが異常ないというのは変だというような話です。

こういった話もいちいち私、実感しますが、ちょっと先へ急ぎます。実は、そういうことを含めて対話の本質的重要性ということをお話ししておきたいと思います。先ほどもちょっとお話ししたんですが、独立検証委員会、これはいわゆる民間委員会の報告ですけど、

その中でこの調査中、政府の原子力安全関係の元高官、東京電力元経営陣は異口同音に、『安全対策が不十分であることの問題意識は存在した。しかし、自分一人が流れに棹を差してもことは変わらなかっただろう。だから黙っていた』と述べておられたということです。これがその報告書の第７ページにあります。

私はこの文言に大変驚いて、この報告書をまとめられた委員長の北澤宏一先生に、これ本当ですかと。危ないと思いながら黙っておられたという経営陣や高官がそんなにいるんですか。異口同音というからには、一人や二人ではないでしょうねというお話をしたら、そうですとおっしゃるんです。これは何を意味するかというと、まことに残念なことですが、社内で率直な対話が機能していないということをそのまま示していることになってしまいます。これは社内だとするならば、政府事故調、いわゆる畑村委員会の報告書には、シビアアクシデントについて、とても説明が難しいという発言が引用されています。『これまでの状態でやっと各地域で安全であると了解されているのに、いまさらシビアアクシデントの話はとてもしにくい』ということを当時の保安院長さんが言っておられます。

また、『シビアアクシデントの対応の事情は各国がそれぞれ事情があるんだと。国際的な動きに遅れたと言われればそれは認めるけど、地域地域で事情があるんだよ。つまりそれはなかなか話しにくいんだ』ということを元安全委員長も言っている。ということは、先の例では社内の対応が難しい。後の例では社外、地域との対話が難しいということを言っておられるのであって、これは言いかえれば事故の問題の非常に大きな背景要因に、対話の困難さがあったんではないかというふうに読めるわけです。

だから，私は今日ここにきて、対話は大事ですということは皆さん百も承知でしょうけど、私は普通の意味でコミュニケーションが大事だという意味ではなくて、安全そのものにかかわって大事だというお話をご紹介しているつもりです。社内対話も対社会対話もうまくいかないのなら、なかなかまともな安全論議はできそうもありません。ここはあまり深入りはしませんが、一つの言いわけとして、シビアアクシデント対策が望ましいとは思っていたけど、基本的には原子力発電所は安全ですと自分も確信していた。地域に行くより自分も確信していたので、あえてこの問題は急いで直面することはしなかったという言い方も聞かれます。

一方、ちょっと別な視点からいうと、既存の組織権利と意思決定機構を最重視する一方で、現実を直視しない、建前を唱え続けていつしか信じてしまう精神病理構造が影響していないかという。これは実は原子力のことについて言ったんではなくて、一時有名だったイザヤ・ベンダサン、山本七平という人がいて、日本教という話をしているんですけど、日本ではこうなってしまうんじゃないかという話を受けてのコメントです。

それに加えて３番目、これは私が先ほども言ったことですけど、安全の歴史を振り返れば、警告は必ず存在するんです。警告は存在しなかった事故は、ないですよというほどに僕は全てを知っているわけではないけど、少なくとも原子力の歴史で有名なスリーマイルの事故、チェルノブイリの事故、それから今回の福島の事故、いずれも警告はありました。ただ、警告はあっても，それを本当に受けとめて、組織全体として対応するにはどうしても時間がかかったかもしれない。でも警告から発災までは、多くの場合に時間はないんですよ。

これは原子力ではないんですけど、例えばＪＲ北海道で２００９年ごろに社長さんが自

殺されるような大変な状況が起こっている。このままではだめだよと言われていても、有効な手を打てなかったから本年に至って立て続けにものすごくたくさんの不祥事が報告されているじゃないですか。やっぱり警告は存在するけど、それがより大きなものに広がるにはそんなに時間はないんだと。警告というのは多分、誰かに見えているんですよ、その予兆が。見えたら早くアクションしなければいけないんじゃないかなというふうに思います。

これはちょっと福島事故の話になるんで、この話は入り出すと長いので、ちょっとそれは別の機会に譲って、ここはとても大事なんでお話ししておきたい。地域の会の現代的意義ということをお話しします。

多様な意見を持つ参加者が意見の違いを乗り越えて討論する、そして運営委員会方式といっていいですかね、それで自立的な運営がなされている。やぶにらみで会議の報告を見ていますと、本番の定例会の会議録はかなり言葉を丁寧に、逐語的に記録されていますが、運営委員会の報告は中で決まった主な要点だけが記されている。これは事実かどうか僕は知りません。僕の推測ですけど、きっと運営委員会ではかなりきついやりとりがあって、それはいちいち文字にしなくてもいいんだと。本音でやりとりをしておいて決まったことだけを議事録にすればいいんだというご了解があってやっているんじゃないかなというふうに思います。非常に賢明なやり方だろうと、一方的に思っているんで、違うんだったら後で違うと言ってください。

先ほど品田村長さんがフランスの地域情報委員会の話もされたと思います。非常にユニークな委員会です。ですけども、それの中を詳細を見てみると、やはり住民の直接的関与というのとは色合いが違うわけです。県議会の議長さんが任命されるという方式です。なので、その意味ではこちらの地域の会のほうがより市民目線というか、より民主的という言い方ができるんではないかと思います。

これも現実は違っているかどうかわかりませんけど、最近、いろんなところでフランスのこの会、ＣＬＩのようなものを日本にはもっとつくらなきゃいけないねということを、今になっておっしゃっている方が何人かおられるように見えます。いろんな大事な場でも、そういう学術専門家の講演もあったりして、有識者の講演に対して、行政の大事なところにおられる方がそういうのを聞いておられるようにも見えますけど、私は、間違ってほしくないな。フランス方式ではなくて日本方式で考えてほしいなというふうに強く思います。地域の会のほうが内容的には住民の主体性がはるかに高く、ずっと充実した側面を持つと思います。

嫌味なことを言いますけど、本件に限らず、外国の方式を日本に導入する試みには注意が必要であって、福島の教訓そのものじゃないですか。福島第一発電所、特に１号炉というのはターンキー方式でアメリカのＧＥの方式をそのまま持ってきたから、ああいう事故になったという批判を受けているにもかかわらず、その後、社会的ないろんな問題を解決するには、また今度はフランスの方式をそのまま持ち込むと。そう考えているとしたら、それは間違いですね、どう考えても。

やはり、福島に持ってくるときに、アメリカではディーゼル発電機を地下に置いたほうが安全かもしれないけど、日本では高いところに置いたほうが安全だよねというような議論ができてればよかった。同じようにやはり、フランスのものを参考にするのは全然構わ

ないんですけど、やはり日本の独自のあり方が探求されていい。地域の会そのものをみんなやってくれとはいいません。これはこれでなかなか難しかった方式だし、いろんな工夫の余地もあるのかもしれません。でも、日本にこういう良好事例があるんであれば、フランスよりもこちらに目を向けてほしいなと私は思っております。

最後に、時間も押してまいりましたので、今後への期待ということでお話をさせていただきます。

さっき、どうしたら動機づけや価値共有についての認知を高められるかという話をしました。こんな図をご覧に入れて、監視と制裁体制の導入が一例としては提案されているよという話をしたと思います。それと同じような話が、実は先行事例である公害病については既になされていて、例えば富山県だからここからそう遠くもないんですけど、三井金属鉱業と被害者住民の間で、いわゆるイタイイタイ病についての住民協定、公害防止協定があります。そこで１９７２年以降毎年、住民や専門家からなる調査団の立入調査が実施されております。今は毎年１回のやつとそれから年六、七回、詳細に調査を行う専門立入調査というのも実施されていて、第１回からのべ立入参加人数は６，０００人になっていると、平成２３年時点で。こういう話も聞いております。これが一番いいお答えかどうかはわかりません。でも、こんなことをやっているところもあるんだということです。今、既に専門家といっても学術機関にいる専門家ではなくて、そういう方々の指導を受けた住民の方が専門家、専門委員として立入をされているという話も聞いております。

要は、これをやってくださいという話では全くなくて、そうではなくて信頼を回復するためにはこういうようなこともあり得るんだという例です。とても困難ですが、それなしに企業の活動はあり得ない。だから、この地域の会の存在とそこでのコミュニケーションを生かして、もしかしたら別な形の信頼の方式というのがあれば、とてもすばらしいんではないかなというふうに思っております。監視と制裁体制の導入だけが可能な選択肢か。そうではなくて、一見すると時間がかかる実りの少ないかのように見える対話にも、大きな意義があるんではないかなというふうに私は考えております。

最後に、これは技術倫理についてですね。技術倫理というのは１９９０年代に入ってから日本の大学でもいろいろ言われていますけど、この技術倫理、また環境倫理を非常に早い時期に主張した今道先生という方が言っておられます。この方が言っておられるのは、中略、真ん中の「理由」というところから言いますけど、２０世紀の科学技術の発達によって、手段としての技術の能力と規模が拡大し行為の及ぶ範囲と効果が増大した。そのため手段としての技術が個人の手を離れ、団体や特に国家権力の所有に属していく。個人のエゴイズムよりも、組織のnosism、ノスイズムというんですけど、この脅威はより大きい。

このノスイズム（nosism）という言葉は、実はあまり知られていない言葉なんですけど、個人のエゴイズムを集団にしたようなものだと思ってください。

原子力を担う地域、組織は格段に高い倫理規範を有していることが必要です。一般の企業レベル、一般の技術担当組織レベルではだめで、格段に高くなければ困りますということを今道先生はその「エコエティカ」という本の中でも言っておられるし、その後のインタビューでも言っておられます。

今、言ったノスイズム（nosism）って聞きなれない言葉でしょうけど、自己の所属する集団を絶対の善とする考え方です。誰もが自分の考えを正しいと思う。それは当然でしょ

う。異なる意見の持ち主と討論すること、これはしばしば苦痛です。対話活動の初期にはそういう実感も多少ありました。でも、対話の継続から見えてくる視点の貴重さも次第に実感して、否定的な見解を持つ方とも、いろんな方ともコラボレーションできるようになったと思っております。

原子力関係の方々には、私はよく申し上げているんですけど、意見が同じ人たちの間で盛り上がって、そうだ、そうだと。再稼働も必要だし、原子力の安全性なんて十分高いとか、福島事故の真相も解明したとか、例えばそういうことを言って、そうだ、そうだと言っていれば、とても心地いいですね。でも、それでは多分、発展はない。やはりしんどくても意見の異なる方と対話することがノスイズム（nosism）を越えるための大事なポイントではないかと思います。地域の会の取り組みは尊敬に値するだけではなく、現代的な意義が極めて大きいと思います。ぜひ困難を乗り越えて、いろんな工夫をされながら、継続していただきたいと思います。

そして、今までもこの地域の会を支えていただいた関係の諸組織ですね、はその活動に必要なご支援をいただきたいと。別に私は地域の会を代表しているわけでも何でもないんですけど、外部で対話活動をやった人間として、この大事さを本当によくわかりますし、ぜひ継続がこれからもなされて、そしていつの日か幸せに、こんな会は要らなくなったねという日が来れば一番いいなと思っております。ただ、それはそう容易なことではないでしょう。その日までぜひ頑張って活動を継続していただくことをお願いして、私の講演とさせていただきます。

どうも長時間、ご清聴まことにありがとうございました。

◎石坂委員

北村先生、大変ありがとうございました。大変興味深いご講演の内容でございました。個人的にも大変、新鮮な切り口、キーワードがたくさんあったかと思います。これがこの後のパネルディスカッションでより我々の足元に、これからの活動に広がっていくように広がっていけば、深まっていけばいいというふうに期待をしております。

それでは、続いてパネルディスカッションに移りますが、その前に休憩と舞台の準備も含めまして、１０分間の休憩をとらせていただきます。それでは、若干押しておりますので、壁の時計で４５分、１０分もありませんけれども休憩に移らせていただきます。よろしくお願いいたします。

（休憩）

◎石坂委員

これよりパネルディスカッションに入らせていただきます。テーマは、「原子力に向かい合う対話の形をさがして～地域の会の今後を見すえて～」ということでございます。

壇上の方々をご紹介いたします。コーディネーターは、北村先生に引き続きお願いいたします。先生よろしくお願いいたします。

◎コーディネーター（北村講師）

よろしくお願いいたします。

◎石坂委員

パネリストでございます。新潟県防災局次長の熊倉健様。そして、地域の会副会長の佐藤正幸さんです。同じく副会長の髙橋武さんです。

それでは先生にお渡しいたしますので、よろしくお願いいたします。

◎コーディネーター（北村講師）

それでは先ほどまで講演していましたけど、ここからは司会者ということでさせていただきたいと思います。最近は、こういう仕事をわりとファシリテーターという言い方をしますけど、ファシリテーターというのは、司会というよりも議論を活発にする、活性化するためのお手伝いということですので。今日は私の話は十分聞いていただいたと思います。ここにいらっしゃる３人の方、それぞれのご経験、お立場から、私の話したことも踏まえ、それから、もしかしたら全く話していなかったことで、これは大事だよということもあれば、それも含めてこういう地域の会、あるいは対話の場というものの意義、重要性、今後の形というようなことをメインテーマにしてお話しいただければなというふうに思います。

すみません。このパネリストの方とは事前のネタ合わせは何もしておりませんので、全くすみませんが突然話を飛ばします。普通大体隣からと言うんですけど、一番そっちからというふうに、髙橋さんからまずは今言ったような、私の講演に触れてでもいいですし、講演になかったことでこれは大事だというお話でもいいのでお任せします。どうぞ数分お話しください。

◎パネリスト（髙橋（武）氏）

本当に当然でしたので、ちょっと驚いているところでございますが、私はこの地域の会に入った経緯が７年前でした。それで、先ほど北村先生のお話を聞きながら、非常に感銘を受けた言葉がやはり「信頼」という言葉でした。

私、７年前かな、中越沖地震前の５月に入ったんですが、７月の地震のときですよね。最初、この地域の会というものは、ある程度の知識情報はあったんですが、やはりテレビで見ている方たちというんですかね、反対の方たちと言ったら失礼なんですけど、そういった方たちと私が実際、会議できるのかなと思っていたときに、地震後の第１回目の地域の会が非常に、正直言ってインパクトのある地域の会でした。暴言といいますか、大きい声での地域の会だったと思っています。

そんな中で、私もそれが第３回目か２回目だったと思うんですが、何でその人たちはこういう発言をするんだなんていうふうにちょっとわからないまま、どのようにしてこの議論を進めていったほうがいいのかなと思ったときに、やはり何回か繰り返すこと、またその人たちの背景というんですか、個人のそれぞれの人格をつかんでいくと、こういうことでこういうことを言っているんだなというのが少しずつわかるようになっていったんですね。そこのときに、地域住民同士のお互いの信頼関係があると、やはり会議の議論がより明確になるというか、議論が深まるのが本当にこの会というか、こういう場がまた原子力であることがまたいいのかなと思った次第でした。そんな感じでよろしいでしょうか。

◎コーディネーター（北村講師）

簡単に、大変強引にくくってしまえば、だから最初は驚くような場だったかもしれないけど、それぞれのご発言の背景を知るに至って、それぞれに対する理解がより深まったと。そして、今はこういう会の意義を十分評価いただいて、副会長の重責を担われているということでしょうかね。ありがとうございました。

じゃあ、同じく副会長さん、今度はもっと古くからなさっているとお聞きしております。佐藤さん、よろしくお願いします。

◎パネリスト（佐藤氏）

随分古いほうの佐藤です。先ほど先生の話に「負の思いに答え切れない原子力」という言葉がありました。私は、やはりいろんな問題、福島事故以降、特に表面化したいろんな問題というのは、やはり安全神話というものをつくり上げてきたことが一番の大きな問題ではないのかなというふうに思います。それは、まあ一方的な対話であったのかもしれませんけれども、そういうものが全ての根源ではないのかなというふうに思います。

例えば、原子力は安全で安価だと。地球環境に優しくて、CO_2も出さない。ですから、地球温暖化防止にも役立つ。あるいは原発をつくると現地は経済的に潤ったり、まちづくりに貢献するんだというようなことで宣伝をされてきましたし、ここが出発点であったわけです。ですから、このためにどうしてもリスクという問題を軽く見て、そしてやはりリスクがあるんだからそのことについて共通認識を持とうということではなしに、進められてきたんではないかというふうに思っていますし、そういうことが、福島事故はあれだけ言ってみれば深刻な事態になりましたけれども、そのほかにも女川も、あるいは福島第二も、あるいは東海第二もそういう危機的な状況を体験したわけです。事故一歩手前まで行ったといっても言い過ぎではないと思うんです。

こういうようなことが電力会社あるいは関係団体、そういう方々の安全神話というものを守って、やっぱり独占を維持する。あるいはそのために国を初めとした行政機関に対しても関与したり、財政的に武器にして行政機関を骨抜きにするとか、その一方で推進団体を抑制して、学者や文化人、政治家まで取り込んで安全神話を一方的に対話として、国民の中に定着をさせてきたという、そういう問題があったと思います。それが、福島事故以降、じゃあ、深く反省をして、それを転換をしていこうという大きなうねりになっているのかなというと、やはりなっていないような気がします。

とりわけ、私たち原発現地の者にとっては、防災の問題。今後、動かそうというふうに電力会社は考えているわけですから、それと同じか、それ以上に防災の問題をやっぱり取り上げて、そして、具体的にどうやるのかということを考えていかなければならないと思うんですけれども、その辺のことについては全然進んでいないということが非常に残念だというふうに思っています。

とりあえずそんなことを今、先生の講演の中で感じました。

◎コーディネーター（北村講師）

冒頭おっしゃったように、だから根拠のない安全神話がずっとそのまま生き残っているような状態が望ましくないんではないかという趣旨のご意見だったというように要約させていただいてよろしいですね。そういうことで了解しました。

それはそういうご発言で、この後、それぞれ議論は後でさせていただくことにして、それぞれのパネリストにご発言いただきたいと思います。

じゃあ、熊倉さん、お願いします。

◎パネリスト（熊倉次長（新潟県））

私の場合は、この会発足の際にも実は県庁のほうで、まだペーペーの状況でしたけども、役職でしたけれども、この会の発足の際に携わらせていただいたという経緯がございます。

先ほども、冒頭の挨拶の際にも申し上げましたが、もともとは平成１４年、東京電力のトラブル隠し、これを契機として、じゃあ発電所の安全性の確認、透明性の確保というの

はどうやって、やっていけばいいんだろうと。柏崎市さん、刈羽村さんともいろいろと悩んでさまざまな対応を考えてきたところでした。その当時は、事業者、原子力って非常に難しい話を事業者が対応している中で、事業者の中にも原子力の分野で非常に閉鎖的な体質があった。先ほど、先生の話でもノスイズム（nosism）というんですか、組織としての動き、こういう方針の中で、個人個人の声はなかなか上げにくいというお話がありましたけれども、そうした体質があった。また原子力発電所、これは今も一緒ですけれども、原子力の規制というのは、法律的には国が一元的に権限を持っていて、県もあるいは地元の市、村も法律的な権限は一切ない。そうした中でこうしたトラブル隠しというものにどうやって対応していけばいいんだろうと。

その当時いろいろ考えて出てきたのは二つありまして、一つは、法的権限は自治体にはないんですけれども、県・市・村と東京電力と安全協定と、任意の協定を結んでおります。この中で発電所への監視体制、チェック能力を強化しようと。一つは、みずから技術的な能力を高めようということで、それが一つ、現在まで続いています県の技術委員会というのがありますけれども専門家、外部から専門の方をお招きして、技術的に発電所のチェック能力を高めようというのが一つの対応でした。

もう一つが、まさにこの地域の会。地元の住民の皆さんの視点から現に地元、そこにある柏崎刈羽の発電所ですね。このふだんの活動状況の透明性を何とか高めることはできないのかと。経緯については先ほど来、話がありましたけれども、当時の柏崎市長さん、それと今そちらにいらっしゃいますけども、品田村長さん、外国で見てきていただいた組織のもの等もありましたけれども、まずは本当に地元の住民の皆さんの視線で、発電所の活動状況を何とか透明性を高くできないのかというのがこの会のスタート。その後、さまざま経緯はありましたけれども、今につながっていると。そして、東日本大震災、福島第一事故を受けて、今後どうしていくのかと。

そうした中で、今ほどお二人の発言にもありましたけれども、さまざまな立場の違いを、それはそれとして現にある中で、どのようにして住民の皆さんの中での対話もそうですし、事業者あるいは自治体ですとか、行政組織、さまざまな組織との間でどういうふうに対話を成り立たせていくのか。非常に大きな問題と思っておりまして、引き続き我々も悩んで参りますし、皆さんからの意見もいただきながら、そうしたことに一歩でも二歩でも、半歩でも前進できるようになればいいなということで考えているところです。まずは冒頭、そんなようなことで。

◎コーディネーター（北村講師）

ありがとうございました。

じゃあ、二、三ちょっと確認させていただきたいと思いますけれども、まず最初に髙橋さんにご確認させていただきたいんですが。最初はかなり会の雰囲気に驚いたというご発言がありました。今、仮にそういうことがあっても驚きませんか。

◎パネリスト（髙橋（武）氏）

はい。今はメンバーほぼ知っていますので、大体驚きはしないですね、はい。

◎コーディネーター（北村講師）

ということは、その大きな声が出てくるとか、不規則発言があるというのは、いつもいろんな場であるんですが、それは一般的に言えばないほうがいいんだろうと思いますけれ

ども。でも、それに対して多分お受けになる心理的なダメージというか、ショックというか、そういうのは大分小さくなったという感じですかね、やっぱり。

◎パネリスト（髙橋（武）氏）

そうですね。この人はこんな感じの主張というか、大体の、私たちもそうなんですけど、個人の背景にある最後の信念というんですか、理念というのは、やはり大体変わらない歴史観を持っている方が多いので。ただ、私自身はどちらかといったら若い無関心層というか、若い世代、若いと言っていいんですか、怒られるかもしれないですけど、若いほうだと思っていたんですが、そんな中で年上の方たちが非常に熱心な背景をよく感じ取ったので、今はそんなに怖くない。怖くということはないですけど、はい。

◎コーディネーター（北村講師）

ありがとうございます。何でそれを聞いたかというと、実は理由があって、私、「対話」という言葉を使って、いつもお話ししています。ディベートではないんです。論争ではないんです。対話というのは、私が勝手に決めているんではなくて、そういうことが大事だといって始められた大阪大学の総長をやった鷲田清一先生という、哲学者なんですけど、この方のおっしゃったことが私は非常に腑に落ちているんです。対話の場に臨んだら、少しは自分が変わる。変わることが対話の大事なポイントだよ。ディベートは負けちゃだめだから変わったらだめなんだと。だから、始まったときに持っていた意見を、意見の旗を持ち続けて、最後まで旗を掲げて頑張ったのがディベートの勝者だけど、対話というのは、場合によったら自分の意見を引っ込めてでも、より深い理解に到達するのが対話なんだよということを言われています。

実は、鷲田先生というのは哲学者ですけど、哲学者、鷲田先生が初めてそれを言ったわけではなくて、もっと古い、そのさらに前の方もそういうことをいろいろおっしゃっています。なので、髙橋さんにわざわざどこが変わったのかなと思ってお聞きしたんですが、少なくとも原子力についての価値判断、評価というのは一応、脇に置いておいて、あるいろんな場で意見の異なる方と話し合って、そのときに相手に対する受け取り方というか、感覚は相当変わられたというのが今のお話だったというふうに理解させていただいてよろしいですね。

佐藤さんも安全神話の話のご提案は、ご指摘はあったんですが、それはちょっと先の話題にして、やはり長くこの会のメンバーでいらっしゃったということで、佐藤さんは変わったものがおありか、それとも変わったものはないのか。あるいは両方、変わったところと変わっていないところとあるのか。そこら辺ちょっとご感想、ご意見をお聞かせいただけますか。

◎パネリスト（佐藤氏）

ちょっとそれるかもしれませんが、私がどんなスタンスで地域の会でいろんな議論に参加しようとしたかということは、先ほど先生の話の中にもありましたけれども、少なくとも私が主張することは賛成してもらわなくてもいいけれどもわかってほしい。そのかわり、ああ、推進の側で主張されていることも、全面的にそうだというふうに賛成はしなくとも、やはりそのよって立つ根拠みたいなものは理解をしようと。そういう思いは常に持ちながらやってきたつもりです。ですから、私も自分の思っていることはできたら少しでもいいから、発想の根源みたいなものはわかってほしいなというふうに思ってやってきました。

◎コーディネーター（北村講師）

大変大事なポイントだろうというふうに思います。そのように思ってなさってこられた結果として、ご自身の問題と、それから例えば最初のうちはかなり意見が異なる、あるいは、この人とは到底なかなか話が通じないと思った方でも背景はわかったというのは、ご意見は何がしかあればお話しいただきたいと思いますが。

◎パネリスト（佐藤氏）

そこまで突っ込んで、おい、わかってくれたかとはなかなか聞いてはいませんけれども、お互いにいろんな話が胸を開いてできるようになったということは、それなりの意味があるんではないかなと思っていますし、それがやっぱり一歩前に出たことなんではないかなというふうには認識しています。

◎コーディネーター（北村講師）

明快にお答えいただけたと思うんですけども、もうこの場は最初から意見の対立がある、違いはある、そういう場です。日本の中でこの地域だけではなくて、どんな政策でも恐らく特定の政策、あるいは特定の論点、話題が出てくれば、いろんなご意見のある方は出るんだろうと思います。皆さんそのご意見の背景には、多分、人生をかけて築いてきた価値観、信念体型があるんだろうと思いますね。だから、そう簡単には多分変わらない。

でも、だからこそ少なくとも、すぐに変わってくれなくてもいいけど、私はこういう前提で物を言っているんだよと。あなたはそういう前提で言っていることを理解したよというあり方というのは、私が先ほどお話しした、これは避けたい、自分だけが正しくて相手は間違っているというノスイズム・ノイシズム（nosism）というものをなくするための大事なポイントなんではないかなというふうに思います。

実は、話は単に新しい言葉を紹介する意味で勝手に言い出しているんではなくて、今道先生という話を出しましたけど、ほかに世界の異文化の研究者であるエドワード・ホールというようなアメリカの研究者も言っています。恐らく怖いのは、例えばCO_2問題とか原子力問題とか、そういう技術そのものが怖いんではなくて、恐らくそれを媒介して起こる社会の中の激しい対立。相手に対するヘイト。最近ヘイトスピーチというのが非常に表現になっていますけど、相手が非常に嫌いになる。何言ってもいいような感じになる。そういうふうな状態が多分、余計怖いんだと。だから、地球温暖化そのものが怖いよりも、地球温暖化のことを預けて、そこで出てくる対立。あるいは、ほかでも、多分、今、グローバル化の時代ということで、例えば違う宗教の、宗教の対立みたいなものも問題になっていますけど、その中にやはり相手の前提は理解したというふうに思えるか思えないかで、結果全く違ってくるように私は思っています。

前提をわかっても意見を変えてくれないのならしようがないじゃないかと人は割と思いがちだけど、そうではなくて、前提があって違う意見を持っている人はいっぱいいるわけですから、みんなが私と同じ意見になってくれれば世の中幸せなのにというのはあり得ない子どもの発想で、そうではないですよね。みんなが違うことを前提にしている。

その意味で、今、佐藤さんがご経験でおっしゃっていただいたことは、簡潔におっしゃっていただいているけど、大変重いことをおっしゃっているのかなというふうに思っております。

さて、じゃあ熊倉さん、ちょっと意地悪な質問だったら抑えてくれていい、答えなくて

もいいけど、僕、組織ということをどうしても考えざるを得ない。さっき組織の中でという話をしました。事故報告書、調査報告書なんかに引用されてしまうと、どうしてもあるトーンを帯びて聞こえるんですけど、私はやっぱり組織が大きくなれば大きくなるほど、個人が勝手を言える自由度というのは制約を受けざるを得ないかなとも思っているんですよ。県庁も組織ですよね。そこでいろいろとご苦労されながら、でも、この対話を行うこの会にずっと来ていらっしゃる。そういう観点ですね。ここは皆さん個人としてのご意見を出していただいている。

それに対して、熊倉さんは組織を背負いながら、一応、代表者としてではないにしても背負いながらおられる。その中で組織の人と個人ということで、何かお気づきの点、あるいはお困りの点、何でも関連したご発言があればいただきたいと思うんですけど、いかがでしょうか。

◎パネリスト（熊倉次長（新潟県））

おっしゃられるとおりで、私も組織の中の人間でしかありませんので、全く自由に個人で活動できるわけではないのは当然のこと。ましてや、役所というのはそういう意味では組織の中の組織というところがあると思います。そうした中で、この場では皆さんそういう組織を離れて、自由な議論、対話をしていただきたいなと思って今まで対応してきたというところがあります。私自身がということになると、それはまたちょっと別なんですけれども、こうした場というのは、非常に重要だろうなということは常々思ってやってきたというのが、この会とのかかわりでいうと率直な感想ですね。

◎コーディネーター（北村講師）

そうすると、将来、例えば役所の立場を離れたらば、個人としてこういうところへ言いたいことを。

◎パネリスト（熊倉次長（新潟県））

そういうのもいろいろとありますけれども。

◎コーディネーター（北村講師）

本当に組織というのは組織の人は組織を背負うんですから、なかなか今、自由闊達な討論といっても、ある種の限定条件はどうしてもつくんだろうかなというふうに思います。

今、熊倉さんの話を聞いたんですけど、せっかく市とそれから村の代表の方がお二人いらっしゃいますので、組織、原子力にかかわる、非常に深くかかわる地域におられる組織のリーダーとして、今日、今までのパネル、それから私の拙い討論の中から何か気になること、あるいはご質問とかあれば、あるいはご意見でも何でもよろしいです。せっかく聞いていただいて、ぜひご発言をお願いしたいなと思います。

会田市長さん、まずお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

◎会田市長（柏崎市）

どうも、いろいろと先生のお話も伺ったりして、今日はいろいろ勉強させていただいておりますが、ありがとうございます。冒頭のご挨拶で申し上げたところですけども、この地域の会が１０年余りということですが、私の個人的な感想をまず申し上げ、感想というか、いきさつから申し上げると、私が市長になったその１年半前ほどですよね、地域の会がスタートしたのは。ですから、地域の会ができたときの詳しいいきさつ、それから市長になったときに、この地域の会というのは一体何やっているんだろうというのが率直な当

初の感想でしたね。

それと、地域の会でのいろんな議論、市の担当の者は毎回出させていただいていると思いますけど、市長としてはさっき申し上げた年１回オブザーバーという形で出席をさせていただくことがあって、ずっとこの地域の会というのはどのようなことをやりながら来ているのかなというのが、私の一番のこれまでの、だからそういう意味では必ずしも十分理解ができないままに来ているという消化不良のところがあって。今日いろんなお話を伺って、それはそれとしてなかなか一つのいい勉強というか、私なりに認識もまた新たにしているところがありますけども。

でも、基本的に先ほどからお話しが出ていますように、柏崎の原子力発電所をめぐる歴史の中で言えば、推進・反対の大きな動きがあって、そして地元では原発については表立って、あるいは個人的にもお互いに話をするということがほとんどできない、なかったという中で、こういう会ができたということの意義も非常にあるんだろなと。しかも、先程申し上げましたように、１０年の実績を持って、それなりに大変な蓄積をしてきたと、今は評価をさせていただいておりますけども、それがちょっと個人的な感想です。

それで、先生のお話を伺って、まさに今こそ信頼が大事だというお話と、そのためには対話が重要であるというお話は、全く私もそのとおりだと思います。原子力発電所については、ずっと安全性をめぐる問題、不安、大丈夫なのかということも含めてずっとあったわけでありますけれども、先ほどのお話ではありませんが、結果として長い間いろんなトラブルがあったり、いろんな問題がありましたけども、大きな事故が日本ではなかったということで、いわゆる安全神話と言われている、それがやはり定着してきつつあったと思うんですけど、福島原発を踏まえてその神話がもちろん崩れたこともありますし、文字どおりパンドラの箱を開けてしまった状態だと思います。

私は、この原発の安全性の問題というのは、基本的には工学の問題だと割り切っているというか、思っているわけでありまして、安全性がどのくらいの確率で保たれているのかという、このことが今回の事故で何年に１回ということになるのかわかりませんが、新しい新規制基準によって、それなりに相当程度、高まることになるのは間違いないだろうなと思っていますが、しかし、それでも要するにリスクがゼロということはありませんし、絶対安全ということはないと。それはどうしても残るわけでありますので、ここのところの理解は人の価値観によって大分違ってくるわけでありますね。

したがって、事故前もそうでありますけど、現状、特にこのような事故を経験しますと、そのことに対する見方は人によって違うわけですし、私は市民の皆さんといろんな場で原発の話はなかなか出ないんですけど、お話を伺いますと、もうさまざまな立場、意見があるわけですので、これを市長として一つにまとめていくというのはまず難しい。一つになることはできないと思います。

そうなると、今後、今も抱えているわけですが、この原子力発電所の問題について、市として、あるいは市長としてどのように判断をし、あるいは市民の皆さんとそういった方向づけをしていくかというのが非常に問われているわけですけれども。このことについては、今まさにお話があったように、この地域の会もそうでありますし、いろんな場でこれまでは全くお互いが対話もできないし、相手の言うことは１００％もう、あの人の言うことはもう全然聞く耳を持たないというようなことが、今でも私はかなりまだあると思って

おりますけども、そういったことをまさに先生がおっしゃったように、信頼関係を回復するということもありますけど、対話をしてお互いをまず理解をするということが今一番求められていると思っています。

ちょっと申し上げたいのは、その先でありまして、つまり、信頼という意味でいうと、一つは今ほどというか、１０年くらいそうかもしれないですね。国に対する信頼感、あるいは専門家に対する信頼感ですよ。これが今ほど失われているときはないわけでありまして、これほど不幸なことはないわけですから、そういう意味ではそういったところに対する、もちろん事業者に対してもそうでありますが、信頼関係をいかに築けるかというのが、今一番、先生もおっしゃるように一番大事なポイントだと思っています。

それとあわせて今、市民の中でのお互いの信頼感というのか、対話を通して一つの意識を形成していくにはどうしていくかということがありますけど、しかしこれ一方には交わらない。ですから、対話を通してある程度お互いの意思疎通を図るということまではできると思いますけども、その先の問題ですね。ここのところが非常に難しいと思っています。

あえて申し上げれば、お互いの価値観、考え方、立場は従前よりも対話をすることによって少しずつ先ほどの話でありませんが、お互い認識は変わっていくとしても違いはそのまま残ると。そのときにどういう判断、選択をしていくのかということになると、それぞれの立場の価値観を持った人たちが、今までよりも柔軟性を持って、物事を見たり、判断したり、意見を言ったりすることができるという方向で考えていくとすると、その中の少なくても全員ではありませんけど共通項ですよね。この点についてはある程度大勢の人たちが共通の認識を持てるというところが出てこないと、なかなか難しいと私は思っておりまして。そこのところを、ですから、今、断定的に語るわけにはいきませんが、いろんな問題に対処しながら、市長の立場で言えば、市民の皆さんにもいろいろ訴えかけたり、対話をしながら、そこを探っていきながら、今後の市としてのそういう方向性を追求、求めていくということが必要なのではないかなと今は考えているところであります。

とりあえずそんなところです。ちょっと長くなりましたけど。

◎コーディネーター（北村講師）

責任をお持ちの立場として、大変貴重なご意見ありがとうございました。これについて、あとまた時間があれば少し討論を膨らませたいと思いますが、承りましたので非常に参考になりました。

じゃあ、品田村長さん、お願いします。

◎品田村長（刈羽村）

今、熊倉さん、そこに上がる前に、ノシズムというのは役所イズムみたいな話で、俺らのことを言われているみたいだなという話をちょっとしました。やっぱりお互いにこの国に生きて、一緒に暮らしているわけですから、究極の目標、目的というのは多分一緒だと思います。そういう中で対話、今、北村先生がおっしゃった相手を打ち負かすことでもないし、勝利することでもないという考え方には大賛成で、そういったことをこの場でも続けてほしいなと思いました。

ちょっと先生のお話の中で、原子力安全というテーマがここにあって、それで経済性というテーマがここに並んだ図解がありましたが、その中に原子力安全の中のリスクトレードオフというふうに書かれていて、リスクトレードオフというのが原子力安全のこの世界

で、これがもし完全に達成されて、リスクを低減できるんだというようなことがあって、初めて経済性の云々という議論ができるという話と承りましたけども……。

◎コーディネーター（北村講師）

それ注意しておく必要があると思うんですけど、最後はリスクトレードオフをやっていいんです。でも今は安全性、信頼性を媒介した安全性に対して非常に信頼が低くなっている状態ですから、今の段階で安全性があると誰かが言っても、あると到底思えない人が相当数いる条件でトレードオフの話にはいかないんではないでしょうかということで申し上げました。

◎品田村長（刈羽村）

わかります。おっしゃっていることはまさにそのとおりなんですが、同時に技術が進み過ぎて、その技術の進化を抑制できなくなってしまっているという、これが現実の社会だと思うんです。これだけのエネルギーを必要とする社会で我々は今の安全な、安定的な暮らしをしていると。ですから、例えば今のこの社会の中で、安心して安全に暮らすための生活の中でトレードオフというのをやっているんだと思うんです。そこにやっぱり、全体の社会安全の中のエネルギー部門の原子力安全というテーマがあるというふうに私は考えるべきだと思うんです。そういう話になって、全体の社会安全という話を議論し始めれば、原子力がポジティブ・ネガティブという考え方の中でも、共通の私はテーブルを囲めると思うんです。

実は、１０年前、この会が発足したころからそういう話をしてもらいたいなとつくづく思っていたんです。どうしてもやっぱり、原子力が安全か、危ないのかみたいなところに議論が行きがちなんですよね。もちろん、それも大事なことなんですが、この前、小泉純一郎さんの、名前を出して悪いですが、ゼロだ、ゼロだということは簡単でしょうけども、やっぱりゼロの道を歩むにもいろんなリスクをトレードオフしながらいかなければいけないわけで、そういう現実を示さずにゼロだ、ゼロだと旗を振るのは私は無責任な感じがしました。

ですから、この会でもできるならばその原子力に対する立場の違いというものはあったとしても、社会の安全ということに関して、さっき子どもの将来に云々という話を紹介されましたが、社会は安全でないほうがいいなんて人は一人もいないと思いますので、ぜひとも同じテーマで議論するような、そういうかじ取り、やってもらいたいな、なんて思っています。

◎コーディネーター（北村講師）

ありがとうございました。この後、マイクをほかの方に渡す前に、今、お二人の首長さんのお話が大変印象的でしたので、ちょっとここで話を膨らませたいなと思います。

一つは、後のほうを先にして、品田村長さんが言われたより大きいスケールで問題を見ないと、小さいスケールの問題はちゃんと解けないんではないかということと私は受け取りました。そう翻訳させていただいてよろしいかと思います。

それは全くそのとおりだと思います。そうなんですが、私が申し上げているのは、原子力は残念ながら、そういう話に移る前に、次の怖いことが起こってしまうので安全についての議論が今までは中止になっていたんだろうと思います。２００２年、やっぱりデータのいろんな偽造とかなんかがあるというのがあって、その後２００７年ですよね。あと、

その間に多分、断層調査の問題とかなんかもあったんですよね、地元的には。それから、今回のやつということで。

私は本当におっしゃるとおりで、大きいフレームで考えたいと思うし、原子力をなくすか、なくさないかという話は当然ながら原子力のあるリスクだけではなくて、ないリスクについても議論しなければしようがないと、これはそうだと思います。ただ、そこに行く前にそもそもの安全性というのは、やっぱり一番身近で、今日はその身近に感じるものだからそこに議論が集中するんであろうと。それが今まで途切れがなかったというのはある意味不幸なことですが、目配りとしてはおっしゃることはよくわかります。できればそういうスケールの話も、地域の会でなさるかどうかは皆さんのご判断ですけど、私自身がいろんなところでやっている原子力対話の中には、それを入れていきたいなというふうには思っております。

それから、会田市長がおっしゃった、いろいろ意思の疎通ができてきたことは望ましい。でも、意見の対立はなかなか解消しない。これをどうするかということについては全くおっしゃるとおりなんです。そんな明るい見通しは僕は持っていないんですけど、一つだけ。去年の８月に原子力に関する国民的討論というのがあって、慶応大学で大規模な集まりがありました。アメリカのフィシュキンという教授が提案したＤＰという手法が使われました。詳細は省略しますけど、何人もの人に集まっていただいて、その人方が討論をしながら意見を専門家に質問を投げる。専門家の質問の回答をもらって、また議論をする。それをやって最終的に例の２０３０年原発ゼロが一番多かったという結論が導かれた。あれが去年の８月４日、５日のミーティングだったと思います。

ところが、私は実はあの場でオブザーバー的に参加していまして、実際に結果として出てきてメディアで報道されているのは、２０３０年０％が多数を占めたという、それだけが紹介されてしまう。そうではないです。皆さんが言っているのは、やっぱり原子力は怖いからやめなければいけないかもしれない。でも、やめて大丈夫だろうか。大丈夫だとも思えない。でも、今やめないとやめるときがないんではないかとも思うとかというような、非常に揺れる思いがたくさんあって、その中でどこに最終的に今、思うかという、その判断が、やっぱりなくすという方向に今１票を投じるという人が多かったというふうに理解しております。

だから、その揺れる思いで、白か黒かさあ投票してくれという形の意思疎通は難しいと思うんですけど、やっぱり例えば、少しずつ原子力を減らしていきたいというお考えの方がいらっしゃる。さすがにどんどん増やせという方は、あまりそういう主張なさらないと思うんで。減らすならどういうスピードで減らすのか。それから、あとは政治的な決定というのは１回決まってしまうと未来永劫動かないように思いがちだけど、場合によったら見直し条項が入ってもいいし。

皆様よくご承知のスウェーデンの１９８０年にあった国民投票で原子力から撤退するというのは、あれは国民の意思表明ですから、政治的決定とちょっとニュアンスが違う。意思表明としてああいうふうに投票した。あの中にちゃんと、僕、スウェーデンにいる友達に聞いて確認しているんですけど、かわりとなる安価で安定なエネルギーができたらそうするんだよと。できないときはもちろん、できないことはできないんだから、それはまた別途考えるというニュアンスが書き込まれていると私は聞きました。

だから、意思の表明と、それからそれを政策実現というのは、間にはまたいろんなやり方があると思う。これは決してごまかすという意味ではなくて、やれないことはやれないから、方向として例えば減らす方向に合意するというやり方もあるだろうと思います。なので、白か黒か、１かゼロかという問題の立て方をしないで、状況をどっちへ変えていくのみたいな話にすると、意思疎通がしにくい中でも少しは話が通じ合うのかなというふうに今は思っております。

ちなみに、そこの会に専門家として来られた東京大学の田中知先生ですね。原子力の推進派の大御所ですけど、彼は「２０３０年までにゼロにしろと言われると、私はどうしても反対をせざるを得ない。２０５０年までゆっくり時間をかけてゼロというんなら、それは原子力の人間としても考える余地はあるんではないか」というふうにも言っていて、それは、だから今日、明日ゼロか、全部再稼働かという話に思えるような問題の立て方をしないということがかなり大きいんではないかなというふうに思っております。

そこら辺も含めて、しなやかな討論という話を今日ご紹介しました。地域の会の第１回の会合で、そういうしなやかな議論をしたいという話をご紹介しましたけど、それはとてもいい言葉だと思います。

時間も大分尽きてきたので、パネリストの方々、本当はたくさんもっとおっしゃりたいと思うんですけど、今までの話と、それからしなやかな討論あたりとのつながりにおいて、今、何かお考えのことがあったら一言ずつご紹介いただければと思います。

やはり、髙橋さんからお願いします。

◎パネリスト（髙橋（武）氏）

首長のお二人様からの発言の中に、特に市長のご発言の中に私の中でやはりトップというのは、いろんな市民からの意見がある中での判断というのは難しいんだなというのがお話を聞いた中で。私、先ほどの熊倉さんの組織の話の中でもあったように、「地元の同意」ってよくフレーズで結構出てくるんですけど、地元の同意というのは首長さん３人なのか、私たち市民の意見というものがどのように今、反映されているのかというのが、非常に不透明で、これからじゃあ再稼働とかという話が間違いなく出てくると思うんですが、その辺が政治判断というのが誰の政治判断なのかがちょっと。

これからその組織というか、私たち対話というものが、じゃあさっきも言った小泉元首相がゼロにするというか、そうなっちゃうのとか、その辺が私どもの対話なのか、政治なのかというところを今、話を聞きながら、どうなっていくんだろうかなというのが、ちょっと疑問というか、今ここで迷っているところというか、そんな感じを受けました。

◎パネリスト（佐藤氏）

しなやかな議論とか、全体的に地域の会でみんながこぞって議論ができるというと、いつも防災なんです。防災の問題に対しては、あまり賛成・反対という立て方での議論はありません。ただ、今、私が危惧しているのは、再稼働問題だけが前面に出ているということが非常に気になります。

というのは、規制基準に満たされていれば、次々と原発は再稼働を認めますというのが今の政権の物の言い方になっています。ところが、それはちょっと違うんだろうなというふうに思うのは、地域防災計画をやっぱり最悪の事態を想定して、またもう一つ別の独立した考え方で、やっぱりそれはどうしても必要なんだということが対になっていないと、

それは、リスクコミュニケーションをお互いに認識し合った上でのものにはならないだろうと認識をしています。なんか今、先に進んでいくと、規制基準だけがひとり歩きして、それで再稼働だということについては非常に不安というか、心配な思いをしていますし。やっぱり、地域の会の中でも防災の問題を議論するときは非常に盛り上がって、時間オーバーになるくらいになるわけですから、その辺はみんなで統一できるところで意見書を出すとか、そんなふうなことができればいいかなというふうな思いを今、持っています。

◎パネリスト（熊倉次長（新潟県））

まさに今、佐藤さんがおっしゃられたとおりで、規制基準、これを満たせば大丈夫というのは第二の安全神話につながっていく話だと思うんです。規制基準自体はどちらかと言えばハードに重きを置いて、最低限これを満たせば、この程度の安全は確保できますよという話でしょうし。

もう一つは、今ほどの話にもありましたし、北村先生のお話にもありました本当に不安を抱えている方に答えるためには、仮にそういう状態になってもどういうふうに対処できるのと。それがまさに防災計画の部分だと思います。その防災計画をどうやるかということで、今、県・市・村含めてその検討をやっているところですが、まさに両輪そろって、初めてある程度、皆さんに対話していただく土台ができる部分というのはあるのかなという気はいたします。

それと、もう一つ、ちょっと違う観点であれなんですけれども、今は会の中での議論というようなことが中心でしたけれども、最初に新野会長のお話にもありましたけれども、外部からこの会の活動というような評価はいろいろ聞くことはあります。ところが地元、本当にこの地域で、じゃあ同じように理解なり、あるいは重要性というのを取り上げられているのかというと、そこにまたちょっと疑問がつくのかなというのを私ちょっと素直に感じているところでして。

北村先生から、こうした取り組みは世界的にはとこう言われるのは大変ありがたいところはあるんですけれども、じゃあ翻って、本当の日常のふだんの暮らしをされている地元の皆さんのところに浸透させていくにはどうすればいいのかなと。それは我々のほうのもっと工夫は必要というところでもあるんでしょうけれども、そうしたところをどうすればいいのか、ここ悩んで、悩んでずっと来ているんですが、こうしたところを何かいいアイデアがあればなというのが、ちょっと大きな問題意識としてあるところです。

◎コーディネーター（北村講師）

お三人ありがとうございました。

今、最後に熊倉さんが言われたこういう活動の取り上げ方について、これはやっぱり私、こういう活動を始めてからいつも思うんですけど、答えは実践の中にしかないんで、頭で、書斎で計画を幾ら考えても多分いいものはできてこない。なので、試行錯誤を恐れずやってみることかなというふうに思います。地域の方にもっと広く認知してもらうための活動も、皆さんがご同意なさるならばそれはあっていいんではないかなと思いますし、それから行政主導でなさるというのもあるかもしれません。

いただいた時間がオーバーしていますので、また最後、格好よく決めて終わるというわけには当然いかない話なんで、すみません、まとまりが非常に悪いんですけど、こういう形で終わらせていただこうかなと思っております。

今日せっかく規制のほうからも、それからもちろん東京電力の方も来ていらっしゃるので、いつもオブザーバーとして参加されていると聞いております。皆さんにもいろんな討論参加をお願いしたかったんですが、ちょっと今日は逆にマイクが回らないところで聞いていただいたというふうにしていただいて、また今後ここで出たような話をいろんな形でご検討いただければなというふうに思っております。時間の方が。

◎新野議長

もう少し大丈夫です。

◎コーディネーター（北村講師）

まだいいんですか。

◎新野議長

質疑を含めて１８時までとさせていただいています。

◎コーディネーター（北村講師）

そうでしたか。そんなに急ぐ必要はなかったですか。すみません。僕ちょっと時間スケジュールを勘違いしました。

であれば、そう言ったので、できれば話していただきたかったけどごめんなさいといった話を取り消しまして、規制庁の、お二人おいでになっていますが、中島課長補佐からお話しいただけますかね。お願いいたします。

◎中島政策評価・広聴広報課長補佐（原子力規制庁）

まず、佐藤さんから少しお話がありました件ですけれども、規制庁としましても、原子力につきましては、新しくつくりました規制基準、それから防災、これについては両方が重要だということが、委員長が申し上げているところでございます。

また、規制基準につきましても、電力会社については、規制基準の下限を見るのではなくて、基準については事業者がみずから判断して、よりいいものにつくってくださいということを言っているところでございまして、従来のような形の設備についての基準を設けるというのではなくて、性能基準という形で原子力の安全性についてはより高めていただきたいということで基準等を整備して、今、一部の電力会社から申請されてきたものについて審査を行っているところでございます。

それから、市長からお話がありました国に対する信頼感、専門家に対する信頼感という話がございましたけども、本来、原子力規制委員会におきましては、原子力安全委員会のときにありました炉安審とか燃安審とかそういうものが法律上はつくることになってはいるんですが、現時点においてはまだその委員の選考についてはできていないところでございます。審査に当たりましても、その都度、専門家について選定をして、今、審査をしているところでございます。

国に対する信頼感というところで、我々の業務としましては、原子力の規制行政に関する分の信頼感というところになるかと思いますが、これまでは原子力安全・保安院時代、経済産業省の中にあるときにおきましては、原子力の安全、それから経済性、それから環境問題とか、いろんなことをてんびんにかけて、それでジャッジをしたわけですけども、今後、原子力規制委員会としては、原子力規制行政という形のこれ１本に絞られていますので、これについて我々は科学的に技術的にどういうふうに判断をしたのかと。これにつきましては、少し対話とはという観点ではなくて、やはり我々がどういうふうに判断した

かと丁寧に説明することというのが、まずは重要なのかなと思っています。

加えて、当然、我々としても最新の知見とか、新たな知見が出てくれば、当然それも反映していかなければいけないという、そういう視点というものを絶えず持ちながら、当然、我々が判断したもののについていろんなご意見もあるでしょうから、そういうことに対しての意見についても真摯に受けとめなければならないのかなと。

そういう目で、今回この場では対話とディベートという、ちょっとそういう二つのカテゴリーの区分け方がありましたけども、我々が説明しなければいけない内容というのは、少し違いがあるのかなというのがちょっと今日のこの場をかりて聞いた中ではそういうふうな感じを受けたところもございました。また、今日のいろんな皆様のご意見については、貴重な意見でございますので、今日の話については私が持ち帰りまして、規制庁、または規制委員会の中で話をしていきたいと思っております。

◎コーディネーター（北村講師）

ありがとうございました。ちょっとだけ補足させてください。

対話が大事だ。ディベートとは違うというのは、そう私、申し上げているんですけど、一方で全てが対話、全てがコミュニケーションだと私は思っていないんです。もし、国が何かお決めになってしまったら、それは決めたんですから、それはそのことについては、今度は真摯な説明をいただくほかないですよね。そこは対話ではないですね。ただし、その中でこの点がわからないということに対してわかりやすく説明するなんていうのは、それは説明であっても当然の配慮であって、それはぜひそういうふうにお願いしたいなというふうに思います。

すみません、若干時間があるということで、これはぜひ申し上げたかったことなんで、司会者ではなくてファシリテーターだと勝手に自分で位置づけて話させていただきますが、今までの会議録を読ませていただくと、非常に技術的な説明がわかりにくい、回りくどいというご批判の発言があちらこちらで読み取れます。これは、私ちょっと自分が技術をやっている人間として、別にそれを正当化するつもりはないんですけど、ちょっとだけ補足しておくと、技術をやっていた人間というのは、どうしたって不確実なこと、不正確なことを言うのはとても嫌です。身にしみて嫌です。だから、ついくどい説明になる。こういう条件のもとでこうであるから、かつこういうチェックをしているので、これこれの理由によってだからいいんですとしゃべりたくなってしまうんです。定量的にもなるべく細かく、故障箇所は何十何カ所ありまして、そのうち何カ所の原因は何でと。それに対して、地元ではそんなことを聞いているんではなくて、それで大丈夫なの、安全は担保されているのということを聞きたいんだとおっしゃると思います。そのようなやりとりを会議録で何回も目にしました。

でも、これはだからそれでいいというんではないんですが、技術をやっている人はそうなりがちだし、不正確なお話をして、結果的にいや、だから誤解を招いたじゃないかということになるのを非常に嫌がります。私もしたがって、ささやかな対話経験を始めた時期からは、先生、説明長いとよく怒られました。結論を先に言ってくれなんて、結構厳しいことを言われて、結論を先に言って済むともうそれで終わりにされるから俺は長くしゃべっているんだよ。全体もあるし、条件もあるんだ、聞いてくれってやったんですけど、でもそこは折り合わなければいけない。私は最後のほうは、そういうまず断定的に結論を言

うように自分の発言タイプを変えたつもりです。

したがって、これこれこういう事象は事故に発展するおそれがあるんではないかと聞かれたら、例えば、最初はそう思わないので、ありませんと。それは事故にはなりません。人体には有害ではありません。なぜならばという話し方にかなり変えたつもりです。でも、だから説明する側はそう努力してほしいけど、現実には技術屋というのはそういう説明はとてもできにくくて、学校で卒業論文の報告をしているときでも前提をちゃんと言えとか、条件をはっきり言わないとだめじゃないかと叱られ続けて今日に至っているんで、なかなかそこは難しいということは、一応ご理解いただきたいなというふうに思っております。

そういうことをよく言われたであろう東京電力さん、ちょっとここら辺で一言、さっきもう回さないと言ったんですけど、時間があるんで回りました。全体的に何なりとご発言いただければと思います。どうぞ。

◎横村所長（東京電力）

ありがとうございます。座ったままで失礼しますが。先ほど組織の話とかございました。これも東京電力にそのまま当てはまるお話でございますけども、やはり組織も改めるべきは改めるべきであって、そのためにはやはり、先ほどの対話というか、ディスカッションでもなく、ダイヤログになるのかもしれませんけども、そういったことが非常に重要になるんだろう。あるいは、そういったことにしっかりと耳を傾けていくのが重要だというふうに思います。

そういった意味で、先ほど先生からも市民感覚で考えて、専門家ではまさかそんなことまでは考えなくていいんですよというところに対して、例えば、でも事故を想定してみてどういった手が打てるのか。自分の頭の中で考えてみる。あるいは、足りないものを考えてみる。こういうことがやっぱりすごく組織を動かすための重要なファクター、特に原子力発電所ではそういった発想が重要だというふうに再認識いたしましたし、そういうふうにやってきたつもりではございますけども。そういった中で、やはりこの地域の会というのは、皆さんが言ったように、どんな心配を持たれているのかというところですね。我々、質問に対してお答えするみたいな形で、対話まで持っていけてないという状況かもしれませんけれども、いろんな方のお話を聞いてそういったところが感じ取れるので、そういったものを、やっぱり発電所のこれからの運営に反映していきたいというふうに改めて今日、思った次第でございます。

◎コーディネーター（北村講師）

あのとき私は二つのことを申し上げていて、組織の中の対話はぜひ風通しよくしていただきたいということと、それから外についての説明力も高めていただきたいということを申し上げたつもりです。

東京電力さんがそういう方向で努力されているであろうことを、私は疑ってないんです。いろんな努力をされているんですが、うまくいかないこというのは、あらゆる組織、人の行動には長い従来の歴史を引きずった慣性の法則みたいなやつがあって、変えにくいと思います。でも、この段階でお伺いいただくことはどうしても必要だろうと思っていましてね。

２００２年、２００３年の段階と同じように信頼が大事だと。これからは全部包み隠すことなく当たっていくというような話が、お気持ちとしてはそうなんでしょうけども、受

け取る側から見るとそう見えないような状態が起こることは、とても不幸だと思いますので、ぜひ大組織の看板を背負ってお話しいただくのは、なかなか大変だと思うんです。よくわかります。私は東北大学の看板を全く背負っていませんので、一個人として話していますから、勝手なことを言っていますし、間違ったらごめんなさいと謝るだけの話なんですけど、お役所の方も電力の方もそういうわけにいかないお立場だろうとは思います。

◎パネリスト（佐藤氏）

今ほど東京電力の所長から、対話という言葉が出ました。ぜひやっていただきたいと思いますし、いつも東京電力の説明会ですね。あれについては、私は消化不良というか、不満というか、あまりいい方式ではないなというふうに思っています。やっぱり皆さんのほうも対話をすると。徹底的に議論をするんだと。受けて立ちましょうというふうな姿勢で、ぜひ対話をしていただきたい。

例えば、夕方６時からやって、９時には終わるんだということではなくて、こういう会場で１日とって、誰もいなくなったらさっさとやめればいいわけですから、とにかく午前１０時からやって、午前中にいろんな説明を終わったら、その後、徹底討論を夜９時ごろまでやるんだぞというようなつもりで、一度設定してみられたらいかがでしょうか。そうすると、今度は質問する人間があるいはいなくなるかもしれません。でも、それくらいの気概を持ってやっぱり信頼回復する、あるいは努力をするんだというのであれば、一度そういうふうにやってみられたらいかがでしょうかと常々思っていたところです。

以上です。

◎コーディネーター（北村講師）

おっしゃっている趣旨は、僕は理解しているつもりです。先ほど小出さんを呼んだときの討論会が我々、おっしゃるほど長くないんですけど、１３時から始めて１７時半までぶっ続けで、途中ちょっとトイレ休憩だけでやったというのも同じ趣旨です。２時間とか、３時間の会ではとてもとても原子力の問題というのは語り尽くせない。それは、今の佐藤さんのご発言はまさにそういう側面を的確に言っていらっしゃると思います。

一方で、もう一つとても大事なことは、やっぱり物事に対する判断、討論というのは最後の最後は価値判断のところ、信念体型のところに落ちていくんだということをもう一つそれはできたら共有したいなと思っております。

例えば、今、再稼働をするのはけしからんと言っていらっしゃる方々、もちろんたくさんいらっしゃいます。でも、その決定というのは法の手続にのっとって決定されるんであれば、それは一応の正当性は持つわけです。説明能力は不足かもしれない。それから、もう一つ、防災とはセットにすべきだというのは、私はそれは同意です。全くそのとおりだと思います。防災までセットしなければならない。先ほど中島さんもそうおっしゃっていますよね。当然、設備側の安全性と、それから防災、それは深層防護の必要条件ですということで、多分そうなっていることを考えていらっしゃることを期待しているんです。

ただ、例えばそれとは別に、今度は全然別の話に見えるけど、菅首相が中部電力の浜岡５号をとめたことは英断であるという人が多いです。少なくとも原子力に批判的な人は英断であるという。でも、あれは超法規的措置ですね。あれは総理の要請であって、別に法的に決めたんではないとかおっしゃるけど、総理の要請は重いですからね。

それから、もう一つは、各発電所が福島の事故の後運転していて、定期点検でとまると

次に再稼働できなくなる。あれも多分、理屈としてはあまりよくわからない。すごくむちゃなことを言うようですけど、とめるなら全部とめるべきですし、動かすなら一定のルールで動かす。何かそういうのがあったほうが筋は通ると思うんですけど、そういうものも全部ですね、あまり自分の立ち位置と別に、論理的な正当性あるいは行政、法律的な合理性ということで議論することも必要なのかなというふうに思っております。

超法規が妥当ならば、大飯原発の３・４号の再稼働も超法規的にというか、あれは超法規ではなかったですけど、妥当という話になってしまうと、議論をどうしていいか、私はちょっとわからなくなるんですね。

なので、いろんなお考えがあると思います。でもやっぱり、自分が原子力に対して持っている思いと沿った方向の決定はありで、反する方向の決定はなしでという、それだけの評価ではなくて、手続として正当か、行政的な合理性を持っているか。もちろん、それより先に技術的な安全性は少なくとも相当程度担保されているかという議論はあっていいんだろうかなというふうに思います。ここら辺、非常に申し上げにくいんですけど、地域の会の皆さんだから立場を超えた物の見方というのをきっとご理解いただけるんではないかなと思って、こういう話をあえていたしました。

今、電力様にお話しいただいたんですけど、さっき私、早とちりして終わりそうになりましたけど、今日はお約束でちょっとフロアのほうには全然振っていないんですよね。でも、最後に１人ともし仮に言ったら、それでもこの１人のチャンスを捉えて語りたいという方がいたら、私は短い時間を語っていただいてもいいように思うんですけど。１人というのはよくないな、２人かな、やっぱり。１分から２分程度でマイクを回しますので、これは言っておきたい。できれば会のこと、原子力の問題というよりもやっぱりこういう対話のあり方という、会のあり方についてご意見いただける方があればぜひただきたいと思います。

挙手いただきましたので、はい、お願いいたします。

◎吉野委員

委員の吉野でございます。

大変勉強になったんですけども、私は対話がすごく大事だということで、すごく勉強になったんですけども、先ほどにもちょっと出ていたんですけど、小泉元総理が原発ゼロということを言ったときの、そういうことがやっぱり非常に今、大事なテーマだと思うんですね。それを無責任だとか何とかということで終わりにしてしまうというんではなくて、その問題をやっぱりしっかり考えてくれれば、福島の事故に対するどう考えるかという。福島の事故でドイツの首相も脱原発を決断したわけですし、日本の首相もそういう方向を出すということを言ったわけですし、その流れという中で、今まで原発推進であった、先頭に立ってやってきた元首相の人がそういうことを言われたということは、やっぱり福島のすごく悲惨といいますか、過酷な現実を深く反省して言っている言葉で、非常に重い言葉だと思いますんで。こういうことを、特に地元の住民というか、地元の県民といいますか、なんかはやっぱりそのことを、対話の、ただ無責任とか何とかいう、いやそっちが無責任だとかそう言い合うんではなくて、そういうことをしっかり議論していく、特に地元の住民はそれをしっかり議論、対話のテーマにしていくべきだと思います。

以上です。

◎コーディネーター（北村講師）

どうぞ。

◎重村原子力発電立地対策・広報室長補佐（資源エネルギー庁）

資源エネルギー庁の重村です。

今の議論の中で、すみません、口を挟むということではなくて、まさに今日の場はディベートでもなく対話ということ。ただし、私どもの立場としては、情報提供者ということで行っていくという一面があるかと思います。それはちょっと簡単にご説明させていただいた上で、番号を振っていない資料がございます。「前回定例会（平成２５年１０月２日）以降の主な動き」ということで、私ども資源エネルギー庁からペーパーを入れさせていただいています。

その中の１番ということで、原子力・エネルギー政策の見直しということで、まさに今、エネルギー基本計画の策定を検討を総合資源エネルギー調査会の基本政策分科会で進めていただいているところです。それで、年内にはまさにエネルギー政策を定めるようにということで、現在議論を進めていただいているところで、これがまとめられた時点で、まさに国のエネルギーの方向性である、もしくはエネルギーのコストであるとか、それから必要性であるとか、そういうものもまとまってくるということで、私ども資源エネルギー庁としては、これがまとまり次第、ある意味ではわかりやすく、非常に整理をして、皆様にそれをお伝えしていくのも一つの使命なのかなと思っているところです。

以上です、すみません。

◎コーディネーター（北村講師）

ぜひ今おっしゃった、わかりやすく伝えていくということは、意を用いていただきたいと思います。というのは、お役所で情報公開していますとよくおっしゃるんですけど、私、いろんな場所で大変失礼ながら申し上げているのは、膨大な議事録や参考資料をそのままホームページにアップしているだけで情報公開しているというのは、ある意味で、そういうことに必ずしも詳しくない市民に対しては不親切だという面もあるので、突っ込まれることを恐れず、ある種の簡略化した説明も出す、その上で詳細説明も出す。例えば、そこら辺まで今、大変お忙しいと思いますけど、さらに一段の汗をかいていただけると、受けるほうはこれで本当に透明性が高まったなと思うんではないかなというふうに思っております。ご苦労さまですが、ご検討いただければと思います。

それから、先ほど吉野さんでしたか、ご意見については、またそれはそれで事実を踏まえて議論をするポイントはあろうかと思います。小泉さんはとにかく昔から皆さんご承知のように、誤解を恐れず簡単明快に割り切った発言をする人なんで、もうちょっと背景の意味もちゃんと聞かせてよというところは、本当は必要なんだろうなというふうに思いますけど、あわせて討論自体は必要だというご意見だろうと思っております。

それでは、本当にそう言っているうちに、今度は時間が過ぎそうなんで、長時間おつき合いいただきましたし、私、あまりうまく仕切れなかったので、散漫なお話になったことはおわび申し上げますけど、でも、いろんな意見を出し合う、率直に話し合うという対話の形だけは何とかつくれたかなというふうに思っております。

パネリストの皆様方、本当にご苦労さまでした。それから、ご参加いただいた皆様方にも厚く御礼申し上げます。

これをもってパネル討論を終了といたしたいと思います。ありがとうございました。

（拍手）

◎石坂委員

北村先生、それからパネリストのお三方、どうも本当にありがとうございました。

皆様におかれましては、もう少々その体制で、壇上でお願いいたします。

それでは、最後の締めに新野会長よりご挨拶、締めをお願いいたします。

◎新野議長

先生、今日は仙台から朝早く電車に乗って柏崎までおいでいただきました。その後もずっと打ち合わせをさせていただいて、講演いただいて、こういう仕切りをいただいていますので、本当に長時間ありがとうございました。

私どもは通過地点のちょうど今日、皆さんと時間を共有させていただいたんですが、私たちは本来、自分の食べるべき仕事をした後に、市民、地域のために情熱を傾けるメンバーと夜な夜な月１回、運営委員はそのプラスもう１回議論を重ねている会です。これ以上のことを望まれてもできないということまで、多分そのくらいいろんなことをしていただいているメンバーです。市長さんや村長さんがおっしゃられたような課題は、この後、また十分みんなと練りながら進めていこうと思うんですが、こういう会が今、柏崎にしかないということが非常に残念だなと思います。

ほかの立地もたくさんおありですし、都会にもこういう会が本来はあったほうがいいのだろうと思います。でも、環境がそれぞれですので、同じスタイルということは必要がないので。ただ、国民である、イコール住民であるような方たちが、自分たちが思ったことを素直に聞いたり、相談したり、考え合ったりということができる場がどこかに提供されていて、そして柏崎にもあるということが今後、多分好ましい形であって。そうすると、本来お聞きになるべく決定権をお持ちの方たちがいろんな地域の意見や考えを聞く中で、いい知恵が生まれてくるんだろうと思います。

こういう会が少し外に広がることと、今日は１０年前を振り返って多くの方にスタート時点のこともう一度振り返っていただきましたので、こういうことが今度は広域の方たちが原子力を考えねばならない時代に入っていますので、そういう方とも共有をさせていただきながら、広い議論が末永く続いて、この地域や国が守られていくことを切に願うメンバーとともに、今日は本当に長い間ありがとうございました。これからもまたよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

先生、ありがとうございました。

◎石坂委員

ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして本日の第１２５回柏崎刈羽原子力発電所の透明性を確保する地域の会定例会、そして公開勉強会を終了させていただきます。ありがとうございました。

それでは、マイクを事務局にお返しいたします。

◎事務局

大変長い間ありがとうございました。

次回の定例会でありますが、１２月４日、水曜日になります。午後６時半から柏崎原子

力広報センターでの開催となります。運営委員の皆様につきましては、１１月の運営委員会が日程調整をさせていただいております。後日また連絡をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

本日でありますが、６時半からの懇親会に参加される皆様につきましては、会場が同館２階の第２会議室となりますので時間までにお集まりください。会場の撤収につきましては、委員の皆様もお手伝いをお願いしたいと思います。

本日は大変ありがとうございました。

以上で、第１２５回定例会・公開勉強会を終了いたします。大変ありがとうございました。